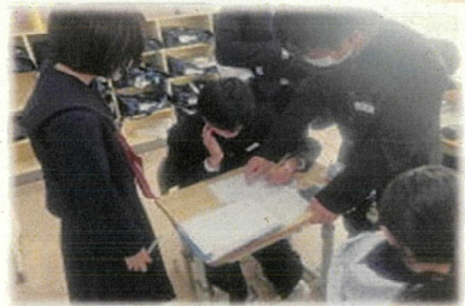
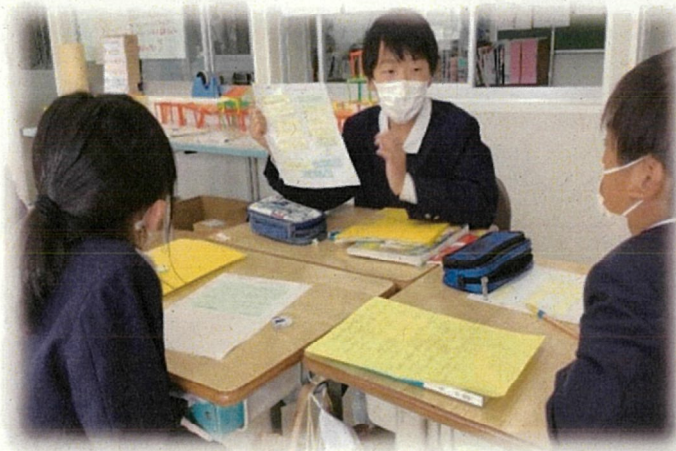


令和5年度

二本松市教育委員会指導委員会研究資料

**自ら考え、主体的に判断し行動する子ども
夢中になって対象とかかわり、学びに没頭する子ども
の育成を目指して**



令和6年3月

二本松市教育委員会

目 次

はじめに

I 今年度の研究概要 P. 1

II 資料の見方 P. 2

III 授業改善の実際 P. 3

IV 研究のまとめ P. 39



はじめに

令和6年能登半島地震や未だ収束をみない感染症等の自然による驚異、AIの発達等による社会の著しい変化など、新たな課題が山積している中、私たちは、それらの課題に対応するため、「何ができるのか」を模索し、周りの人々と協働して解決していく力が求められています。学校においても、夢や希望を追い求めて未来を切り拓くことのできる子どもを育成することができるよう探究的・協働的な教育活動を展開しています。特に授業では、子ども一人一人が思いや願いのもとに自らの問いをもち、夢中になって他者との対話を活性化させて解決するなど、子ども主体の学びを推進し、一人一人の学びの状況に応じた効果的な指導が求められております。

二本松市教育委員会指導委員会においては、教職員の授業力向上を目的とし、本市の目指す子ども像「自ら考え、主体的に判断し行動する子ども」「夢中になって対象とかかわり、学びに没頭する子ども」の育成を目指して研究を推進してまいりました。今年度は、本市の目指す子ども像に迫るため、指導委員各々が目の前の子どもの学びの実態と日々の授業を見つめ直したときに浮かび上がる課題を洗い出し、改善の視点を明確にして授業を改善し続け、指導力の向上を目指してきました。

本冊子は、指導委員各々の視点による手立ての実際や成果と課題から授業改善に迫るための研究についてまとめたものです。目の前の子どもたちを思い浮かべたときに、その成長に寄与するためにいかに授業を改善していくのか。そして、実践で明らかになった成果や課題を次の実践にどのように生かしていくのか。指導委員各々が、「目の前の子どもに寄り添った授業改善こそが真に子どもの資質・能力の向上につながる」という思いのもと、目の前の子どもたちの学びに寄り添い、同僚性を発揮しながら研鑽を積み重ねた熱意あふれる実践となっています。

教師自身が今現在行っている授業改善を目の前の子どもたちの学びと照らし合わせたとき、その改善が子どもたち一人一人の学びにつながっていたのか、同僚とともに問い続け、学び続けていくことこそが、授業力向上につながり、子どもたちの笑顔あふれる授業が構築できるものと考えます。学び続ける教師のみが学び続ける子どもを育成できるという信念のもと、本冊子が本市の教職員のこれからの授業改善に活用され、より質の高い授業実践につながることを期待しています。

結びに、指導委員の皆様のご真摯な取組に敬意を表しますとともに、各学校の校長先生・園長先生、諸先生方の御理解と御協力に改めて感謝を申し上げます。

令和6年3月

二本松市教育委員会教育長

渡辺 惣吾

I 今年度の研究の概要

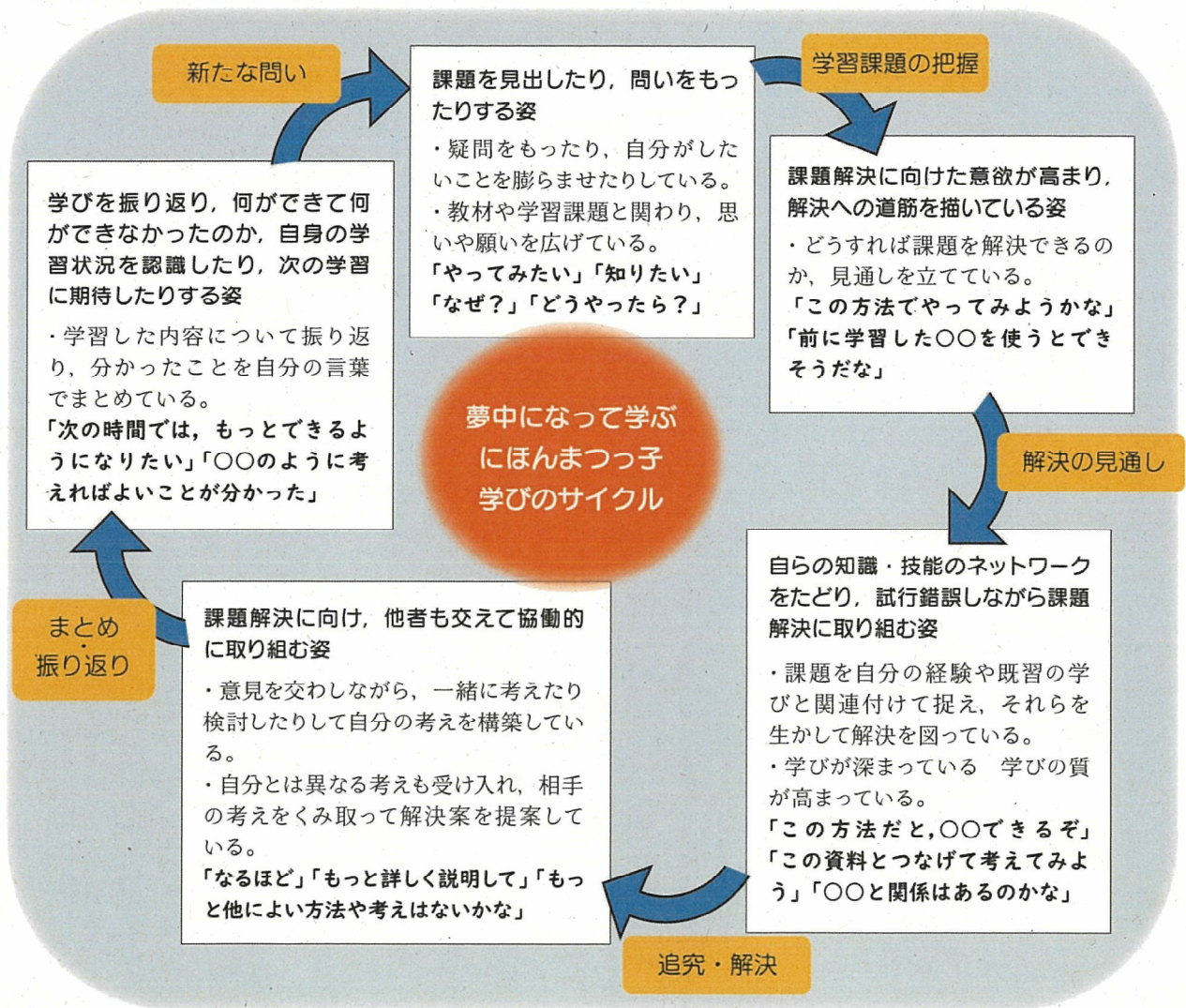
二本松市が目指す子どもの姿

自ら考え、主体的に判断し行動する子ども
夢中になって対象とかかわり、学びに没頭する子ども

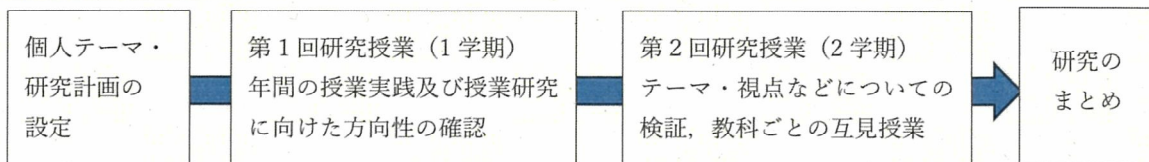
子どもの現状（課題）

- 自分から行動することが苦手（受け身、「待ち」の姿勢）
- すぐに諦め、止めてしまう（持続性・粘り強さに欠ける）
- 自分の考えをもち、言葉で伝え合うことが苦手（聞き方、知識量、語彙力、表現力に課題）

夢中になって学び、学びに没頭する具体的な子どもの姿



研究推進の方法



II 資料の見方

○学年
教科

「单元名」
研究テーマ

育成したい資質・能力を具体的な子どもの姿でイメージし、研究テーマとして設定しました。

1 单元によせる授業者の思い

本学級の児童は、素直で、学習にも真面目に取り組む。

国語科の事前アンケートでは、意見文などを書く学習において「何をどう書いたらいいかわからない」

目の前の子どものよさや課題を踏まえ、どのような子どもに育てたいか、どのような思いで授業づくりに臨んだか等、授業者の思いをまとめました。

2 授業の実際

視点Ⅰ

視点Ⅱ

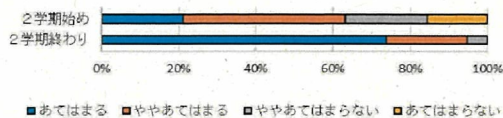
視点Ⅲ

設定した視点に沿って、具体的にどんな手立てをとったのか、その手立てによって子どもたちはどのように学んだのかを示してあります。

子どものことばや写真から、夢中になって学ぶ子どもの様子をご覧ください。

3 子どもの変容

どんなに難しい問題でも誰かと協力しあえば解決できると思う。



子どもの学びを客観的に捉えられるように、意識調査を実施しました。アンケートの項目は授業者が自分の目指す子どもの姿に沿って設定しました。

4 研究のまとめ (○成果●課題)

授業の視点に関して、アンケートの結果も踏まえながら、成果と課題について述べています。また、課題をそのままにせず、具体的な改善案を考えました。その内容については、実際の指導案をご覧ください。

実際に使用した指導案やワークシートなどをQRコードから読み取ることができます。ぜひご活用ください。

実際の指導案はこちらへ▶



Ⅲ 授業改善の実際

第5学年
国語科

「よりよい学校生活のために」～二本松南小学校を百倍ステキにする方法～
自分の考えを伝え合い、自分の考えを再構成していく中で、新たな
問いをもつ児童の育成

二本松市立二本松南小学校 樽井 奈緒子

1 単元によせる授業者の思い

本学級の児童は、素直で、学習にも真面目に取り組む。

国語科の事前アンケートでは、意見文などを書く学習において「何をどう書いたらいいかわからない」という理由から、「書くこと」に苦手意識をもつ児童が多いことが明らかになった。これまで、「書き方」を教師が一方的に教え、児童の作品を教師が添削して終わる授業が多かったことがその要因と考えられる。

よって本単元では、児童が作品を書くまでの学習過程を大切にしたいと考えた。児童自らが「書き方」を獲得し、他の場面でも使える汎用的な力として身に付けさせたい。さらに、単元全体を振り返り、何ができて何ができなかったかを明確にすることで、次の学習活動へとつなげ、学びを連続させていきたい。



2 授業の実際

視点Ⅰ

相手意識・目的意識をもたせる単元デザインの工夫

本単元では、課題を自分事として捉え、児童自ら「書きたい」と思えるようにするために、「南小をもっとよくするにはどうすればいいか」という課題を設定した。また、「意見文を書いて、学校のホームページに載せ、多くの人に読んでもらおう」というゴールを提示し、相手意識・目的意識を明確にした。

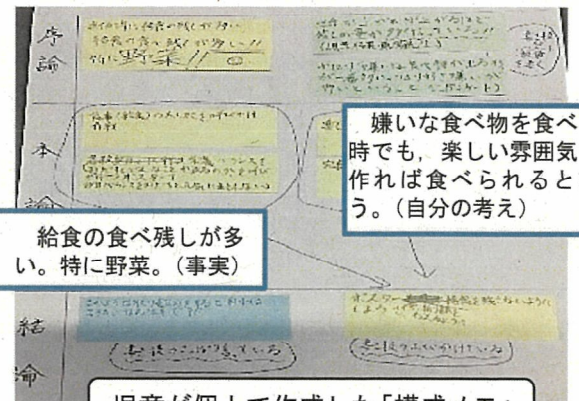
児童は、まず、自分たちの生活を振り返り、「給食の残しゼロにしたい」「元気なあいさつができるようにしたい」等、自分が解決したいテーマを考えた。

次に、実際に測定したりアンケートをとったりして情報収集を行った。



給食の残しの量を実際に測定

そして、調査結果を基に、自分が実際に体験して分かったことや、考えたことを「構成メモ」に整理した。



給食の食べ残しが多い。特に野菜。(事実)

嫌いな食べ物を食べる時でも、楽しい雰囲気を作れば食べられると思う。(自分の考え)

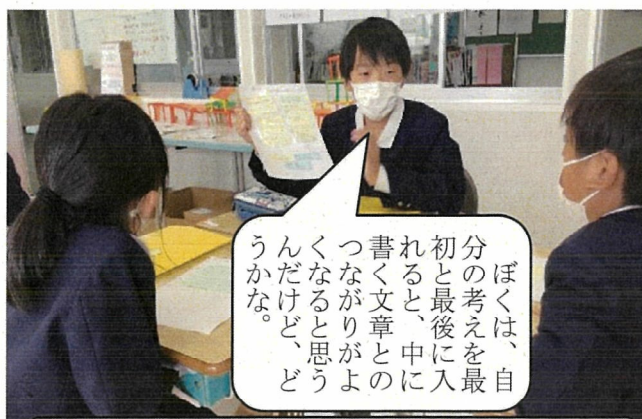
児童が個人で作成した「構成メモ」

視点Ⅱ

自らよりよい「書き方」を獲得させるための共有の場の設定

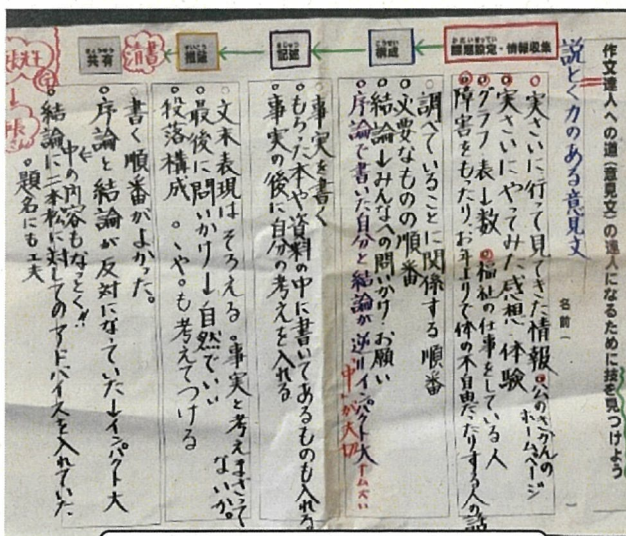
児童自ら「何をどう書けば相手に伝わるのか」を考えさせるために、「構成」段階「記述」段階の後にそれぞれ「共有」場面を設定し、自他の表現を比べる相互評価活動を行った。「共有」では、間違いを正す添削だけでなく、相手の構成や文章のよさを見付け合い、そのアドバイスを生かして自分の考えを明

確にできるようにした。また、伝えたい相手の立場に立って見直す意識をもたせ、自分の考えを構築させた。



個人で考えた構成メモを「共有」する場面

さらに、友達との「共有」で得た「書き方」のよさを「書きワザ」としてまとめた。グループでの「共有」後に学級全体で「共有」し、「書き方」を一般化することで本単元での学びを明確にし、次に文章を書く際、使える力にしたいと考えた。



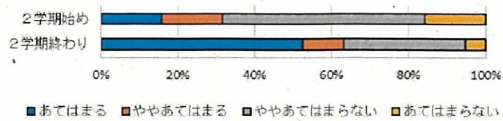
学級で共有した「書きワザ」

学級で作成した「書きワザ」は、いつでも振り返ることができるように学級内に掲示しておいた。さらに、他の単元で学習し、新たな「書きワザ」を発見した際には、内容を付け足して更新する姿が見られた。

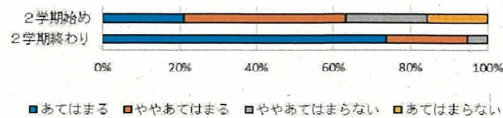
児童は「書きワザ」をもとに自分の意見文を見直し、考えを再構成していった。

3 子どもの変容

学習が進まなかった時、自分の考え方を振り返って考えることができる。



どんなに難しい問題でも誰かと協力しあえば解決できると思う。



〈考察〉

どう書いたらよいか迷った時に、「書きワザ」を生かし、自分の考えを再構成しながら授業に臨もうという意識が高まっていることが分かる。

さらに、難しい問題にぶつかった時でも、「共有」することで友達と協力し試行錯誤しながら解決しようとする児童が大きく増えたことも明らかになった。

4 研究のまとめ (○成果●課題)

【視点Ⅰ】

○ 書くためのテーマを児童の身近な生活場面と結び付けることにより、課題が自分事となり、実際に調査したり、調査結果を基に友達と話し合ったりすることで、書くための材料を自分で集めることができた。

【視点Ⅱ】

○ 「共有」をする際に「書きワザ」が根拠となり、児童は自他の「書き方」のよさに気付くことができた。さらに、本単元で何を学んだかを明確にすることができた。

● 出来上がった作品の評価に際して評価規準を教師が作成したが、今後は、身に付けさせたい力を明確にしたルーブリックを児童とともに作成し、「何ができればいいか」を児童自身が意識できるようにしていきたい。



実際の指導案はこちらへ▶

「初恋」

言葉にこだわって作品と向き合い、自分の考えを創り上げていく
子どもの育成

二本松市立小浜中学校 中山 万由

1 単元によせる授業者の思い

本学級の生徒は、日頃から授業に意欲的に取り組んでおり、教師の発問に対しても積極的に発言する。また、課題に対して自分の考えをもち、友達と考えを比較しながら課題解決することもできる。しかし、「読むこと」の学習においては、根拠ではなく自分のイメージのみで内容や作者の思いを解釈してしまう生徒が多い。

よって、本単元では、その言葉を用いた作者の意図を考えたり、類義語と比較したりしながら考えを深め、友達と意見を共有して自分の考えを構築するような授業を展開したい。また、「振り返り」を充実させることで、何ができたようになったか、これからどんな力を付けていくべきなのか等、自分の学習状況を分析する力を育成していきたい。



べることで作品解釈を深める「活用」段階の二段階の単元をデザインした。

変更後の「初恋」は、第三連が削られ、最後の一文「問ひたまふこそこひしけれ」が「うれしけれ」に書き改められている。生徒は、第三連を削った理由や「こひしけれ」を「うれしけれ」に書き改めた理由を考え、その理由を根拠として、自分がよいと思う詩を選択した。

変更後の「初恋」(「早春」より)

初戀
 まだあげ初めし前髪まへがみの
 林檎りんごのもとに見えしとき
 前にさしたる花櫛はなぢの
 花ある君と思ひけり
 やさしく白き手をのべて
 林檎をわれにあたへしは
 薄紅うすべにの秋の實みに
 人こひ初めしはじめなり
 林檎畑りんごばたけの樹きの下もとに
 おのづからなる細道ほそみちは
 誰が踏みそめしかたみぞと
 問ひたまふこそうれしけれ

同じ作者による同じ題材の詩を読み比べることで、作者の経験や考えの違いなどの背景に感わされることなく、語句や表現についてどのように吟味しながら詩を作ったのかということに焦点を絞って考えさせることができた。

2 授業の実際

視点 I

言葉に対する興味・関心をかき立てる課題設定の工夫

単元計画

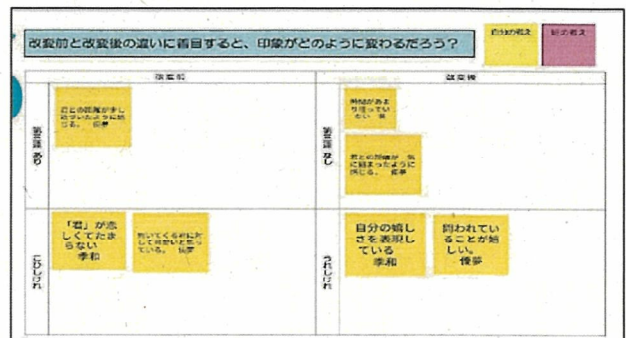
時	・学習活動	段階
1	・詩を読み、どのような情景がイメージできるか考える。	習得
2	・詩の構成をもとに、「初恋」は成就したかを考える。	
3	・作者が詩を書き改めたのはなぜかを考える。	
4 本時	・変更前と変更後の詩を読み比べ、どちらの詩のどのところに魅力やよさを感じるかを考える。	活用

本単元では、教科書教材「初恋」の読解をする「習得」段階と、藤村自身が変更した「初恋」と読み比

視点 II

自他の考えを比較させるための共有場面の設定

共有の場面では、共有アプリを活用し、互いの考えを比較しながら話し合いを行った。

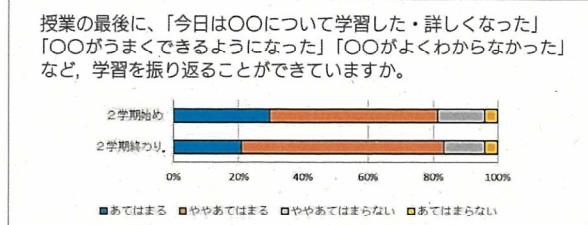
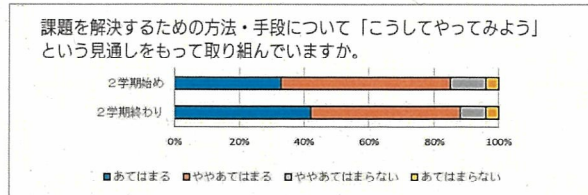


あるグループは、改変前の第三連に着目し、「恋の盃」から恋に酔っている様子や二人がお酒を酌み交わす情景をイメージし、少年と少女の恋から成熟した大人の恋を表現しようとしていると読み取った。また、交流の中で、第三連には「林檎」が出てこないことにも気付いた。「林檎」は甘酸っぱい初々しい「初恋」をイメージさせる言葉であり、「林檎」が入っていない第三連を削除した方が詩に統一感が生まれると話し合っていた。



他のグループの考えを比べて、「同じ考えだ」「何でも考えたんだらう」と、さらに話し合いを進めている。

3 子どもの変容

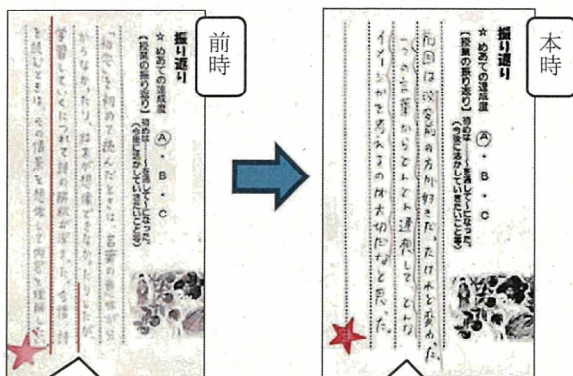


〈考察〉

「習得」「活用」の二段階の学習を設定したことで、どのように課題を解決していくかという見通しや、自分の考えをもって授業に臨む生徒が増加した。振り返りについては、「あてはまる」と答えた生徒が少なくなったのは、生徒が自己の授業における振り返りを客観的に捉えたことで、評価が厳しくなったと考えられる。

視点Ⅲ

自らの学習状況を把握させ、次の学びにつなげる振り返りの工夫



「初恋」を初めて読んだときは、言葉の意味がわからなかったり、結末が想像できなかったりしたが、学習していくにつれて詩の解釈が深まった。今後詩を読むときは、その情景を想像して内容を理解したい。

前回は改変前の方が好きだったけれど変わった。一つの言葉からどんなイメージかを考えるのが大切だと思った。

自分の考えの変容について、なぜ変わったのか、変わらなかった理由は何かという根拠を明記しながら振り返りをした。学習を通して、言葉や表現から作者が意図したことを読み取ることによって解釈が深まるということを知ることができた生徒が多かった。

4 研究のまとめ (○成果●課題)

【視点Ⅰ】

- 読み比べる学習活動によって、その違いに興味・関心を高めるとともに、自分のものの見方や考え方を広げさせることができた。
- 読み比べる上で、違いに注目させ、深い読みにつなげられるよう、発問を工夫する必要がある。

【視点Ⅱ】

- グループで考えを共有させたことで、各自の考えを比較し、語句や表現を追究して考えを深める姿が見られた。
- 全体で共有する場面において、ポイントとなる発言を拾い、さらに考えを広げられるような教師のコーディネートが必要である。

【視点Ⅲ】

- 振り返りの視点を示したことで、自分の学びがどのように変容したかを振り返ることができた。
- ノートやプリント、タブレット内のワークシート等、授業での学びの形跡が散り散りになってしまう。学びと振り返りを結び付ける「振り返りシート」の工夫が必要である。

実際の指導案はこちらへ▶



「戦国の世から天下統一へ」

多面的・多角的に社会的事象を捉え、根拠をもとに説明・議論し、
考えを深める授業

二本松市立杉田小学校 山本 雄太

1 単元によせる授業者の思い

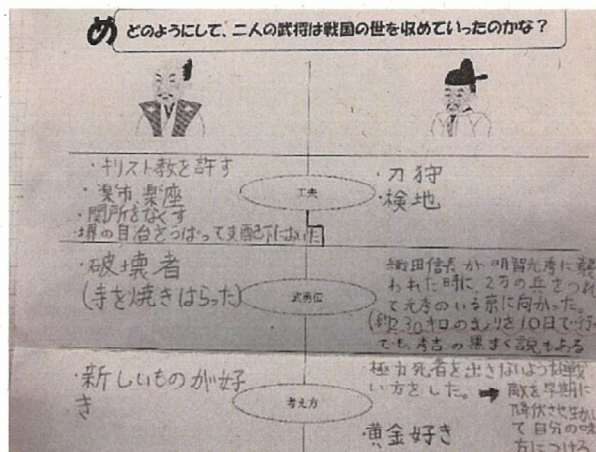
本学級の児童は、自分が興味を持ったものについて調べ、それを新聞やレポート等の形でまとめる学習を多く経験している。そのため、課題意識を持って調べ、資料を活用して社会的事象をまとめることはできる。

しかし多面的・多角的な視点で調べたり、考えたりすることが少なく、まとめたものからは偏った資料や考えが見受けられる。また、書くことは得意であっても、表現・交流に対しては消極的で、話し方や聴き方、深め方には課題が見られる。

そこで本単元では、織田信長と豊臣秀吉の生き方から、全員に共通する単元を貫く「問い」と個人の「問い」を立て、解決を目指して調べ、説明したり質問したりする活動を通して、考えたことを自信をもって表現できる力を身に付けさせ、説明・議論することで考えが深まるよさを実感させたい。



してから調べ学習を行った。その際、どちらか一方の人物を調べるのではなく、比べて考えられるように、ワークシートに書き込めるようにした。押さえておきたい事象は全体で確認し、資料集やインターネット、本などを使い、さらに詳しく調べ、天下統一に向けて行った工夫、武勇伝、その人物の考え方など項目ごとに記入させた。



授業の最初には、根拠をもって説明・議論できるように調べたことを全体で振り返り、どちらの功績が大きかったかという議論へと展開させた。

2 授業の実際

視点Ⅰ 単元を通した学習課題の設定

前時までに調べた二人の武将の政策などをもとに、どちらがより天下統一に向けて働きが大きかったか（活躍したか）という二項対立型の課題により自分の立ち位置を明確にし、根拠を持って説明、議論できるようにする。

まず単元導入時に、「織田と豊臣のどちらが天下統一に向けての働きが大きかったか」という単元全体の学習課題を設定し、児童自らが立場を選択し、意欲的に調べ学習を行えるようにした。

次に、選んだ人物や個人の「問い」について確認

視点Ⅱ 考えを深めるための表現する場の設定

① 多様な考えに触れ、考えを深められるように、ワールドカフェ方式で話し合いを行う。



生活班での議論
→ホストを残して
違う班で議論→元
に戻って新しい情
報等の共有、報告
を行った。

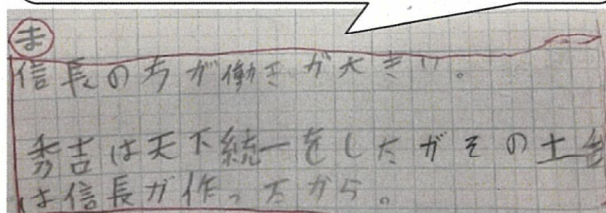
話し合いを生かし、どちらの働きが大きかったか、最終的には自分で判断する。



② 話し合い後に自分の考えをまとめる時間を確保し、他者や自分の考えと対話し、考えを深められるようにする。

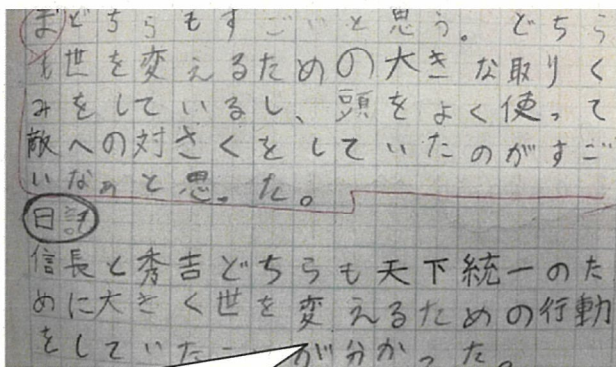
「織田と豊臣のどちらが天下統一に向けての働きが大きかったか」について、ワールドカフェ方式で議論を重ねた。様々なメンバーで複数回話し合いをする機会を作ったこと、事前に調べ学習をしていたことや授業の最初に二人の武将の功績について振り返りをしたことなどにより、安心して伝えることができていた。その話し合いの様子からは、目指す児童の姿が見られた。

話し合いを通し、天下統一の土台を築いた信長の功績を確認し、自分の考えをより確かなものにした。



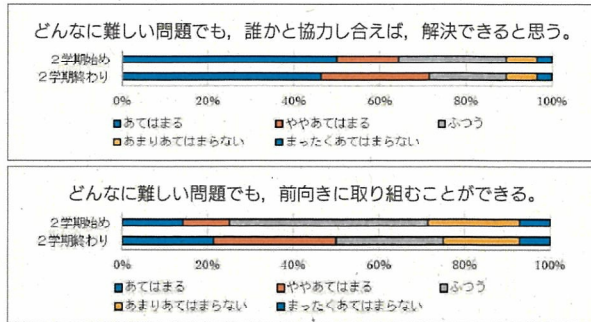
視点Ⅲ 表現のよさに気付く振り返り

振り返りの視点をもたせて、社会日記を書く。振り返りでは、「わ(わかったこと)・た(たのしかったこと)・が(自分・友達のがんばったこと)・し(しりたいこと)」の視点を記入する。



本時の学習では、「分かった」の記述が多く見られた。二人の武将の功績が理解できていた。

3 子どもの変容



〈考察〉

「どんなに難しい問題でも、誰かと協力し合えば、解決できると思う」という質問では、肯定的な回答が64%から71%に増加した。また、「どんなに難しい問題でも、前向きに取り組むことができる」児童は7人から倍の14人に増えている。これらのことから、仲間とともに協力して課題を解決してきたことで、表現することへの抵抗が少なくなり、説明や議論をすることで考えが深まるよさを味わうことができたのではないかと考える。

4 研究のまとめ (○成果 ●課題)

【視点Ⅰ】

- 単元全体の学習課題を解決するため、より多くの社会的事象を知ろうと資料集や本、インターネットで意欲的に情報収集していた。
- 多面的・多角的に捉えるために、対象の人物を別の人物や時代と比較する必要があると感じた。

【視点Ⅱ】

- ワールドカフェ方式によって多様な考えに触れ、多面的・多角的な視点から説明・議論ができた。また、二項対立型の課題であったため自分の意見をもちやすく、自信をもって表現できた。

【視点Ⅲ】

- 本時の振り返りからは「分かった」などの学習に対する肯定的な記述と考えの深まりが見られ、アンケートでは自己肯定感の高まりが見られた。
- 自分や友達のよさや力の高まりを感じる記述が見られなかった。振り返りでは、「自分や友達のよさ」など具体的な視点の提示が必要であった。

実際の指導案はこちらへ▶



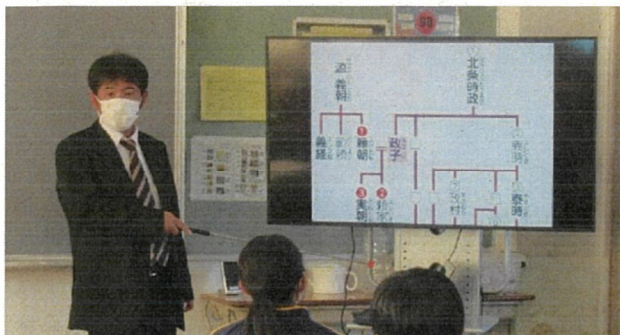
1 単元によせる授業者の思い

本学級は、歴史に関心がある生徒が多い。また、小集団活動の中で自分の考えをもち活発に意見交換ができる生徒が多い。

本単元は武士の登場から武士の台頭、院政、鎌倉幕府の成立、承久の乱をへて武士が中心となっていく政治・生活・文化の変化を学習する。

歴史の学習内容は、時の権力者を中心に進められていく。そこで、権力者ではなく家来たちの視点から見た歴史を考えさせることで、今後の歴史学習を多面的・多角的に大きな時代の変化を捉えることができるのではないかと考えた。本時では、生徒が承久の乱の前後を御家人としてどう考え行動するかについて、小集団活動を通して協働で考えさせるようにした。当時の御家人の心情に迫るために、後鳥羽上皇の討幕命令に揺れ動く御家人の様子や北条政子の演説などが収録されている再現VTRを資料として用いた。また、承久の乱後、六波羅探題設置や御成敗式目の制定が北条氏と御家人との関係にどのように影響があったかを考える新たな課題も提示した。

振り返りの場面では、御家人の立場から承久の乱を捉え、歴史が大きく変わっていく様子を板書で振り返り、自分の言葉で自分の考えや分かったことを表現できるようにした。

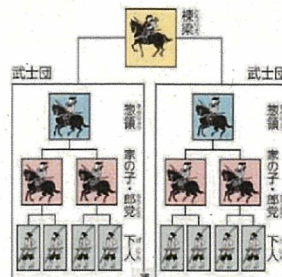


2 授業の実際

視点Ⅰ

社会的事象を自分事として捉える課題の工夫

- ① 課題追究の視点を、承久の乱前の御家人に絞って考えさせた。
- ② リアリティを出すために、承久の乱前の御家人が置かれている状況や北条政子の演説が収録されている再現VTRを段階に応じて用い、御家人を自分事として考えさせた。
- ③ 承久の乱後、鎌倉幕府や御家人の立場はどのように変化したかを考えさせ、内容を深めさせた。



視点Ⅱ

協働的に取り組ませる学習形態の工夫

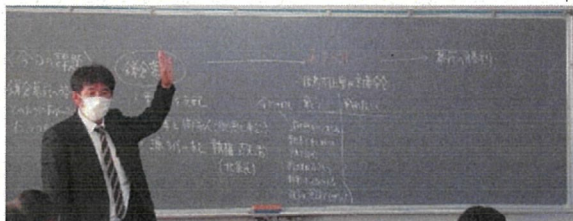
- ① 4人の班を作り、一つの武士団に見立てて考えさせた。
- ② 家来をもつ惣領の立場から、「幕府につくか」「朝廷につくか」について各班で考え、根拠をもって判断させた。
- ③ ホワイトボード型の協働学習ツールを使い、一人一人が意見を自由に書き、様々な考えを可視化できるようにした。



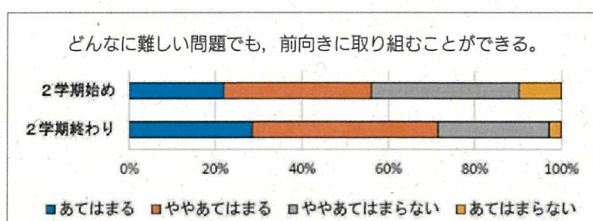
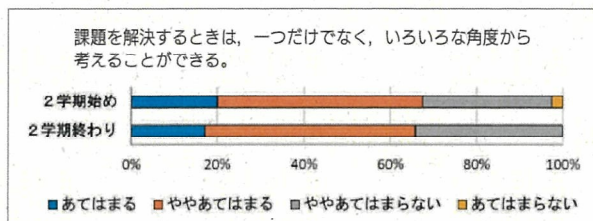
視点Ⅲ

自分の考えや思いを振り返ることができる板書の工夫

まとめと振り返りの場面で、学習内容が一目で分かり、自分の考えや思いを振り返ることができるよう、構造的な板書づくりに努めた。



3 子どもの変容



(考察)

「いろいろな角度から考えることができる」に対して、「あてはまらない」はなくなった。自分の考えに自信がなくて意見を出せない生徒もいることが考えられるので、班での対話の中で肯定的に自分の意見を話せるようになったと考えられる。

一人で学習課題に取り組むより、ペアもしくは小集団での対話的な学習を取り入れることによって、粘り強く課題に取り組むことができる生徒が多くなっている。

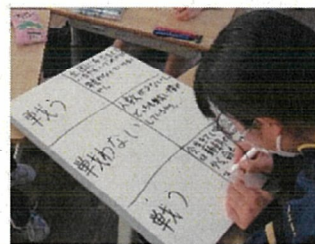


4 研究のまとめ (○成果●課題)

【視点Ⅰ】

- 北条政子の演説を含む臨場感のあるビデオ教材を使用することによって、御家人になったつもりで考えることができた。
- 承久の乱の結果を御家人の立場から考えることによって、執権北条氏との信頼関係が強まったことを理解し、課題について考えることができた。

- 御家人の選択肢として、「幕府につく」か「朝廷につく」かの2択で進めるはずだったが、朝廷と「戦う」か「戦わない」にしたため、生徒の中に混乱が生じてしまった。



- 前段をコンパクトにして、承久の乱後の鎌倉幕府と朝廷との関係を考える時間を多くとり、学び深めるべきであった。

【視点Ⅱ】

- 班の構成を4人にしたため、各班とも全員が課題について考え、多面的・多角的に考えることができた。

- ホワイトボード型の協働学習ツールを使うことによって、出てきた考えを可視化・整理することができ、自分の考えをもてるようになった。

- 生徒の立場が「惣領」であることをもう少し強調しておけば、さらに深い話し合いがなされたと考えられる。

【視点Ⅲ】

- 板書を見ながら、まとめや振り返りをし、班での話し合いをもとに根拠を明確にし、自分の言葉で表現する生徒が多くなった。

- 協動的な学習活動を行った場合、板書をノートに書き写す時間を確保することが難しい。学習内容の定着を図るために、どのように生徒の手元に残すかを研究していく必要がある。

実際の指導案はこちらへ▶



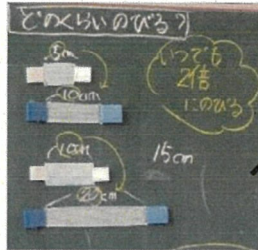
1 単元によせる授業者の思い

本研究は、特別支援学級在籍の第4学年2名を対象としている。基本的な計算技能は身につけているが、問題を読んで正しく立式することに課題があるため、どう解決すればよいのか見通しがもてず、解決が困難な様子が多く見られる。

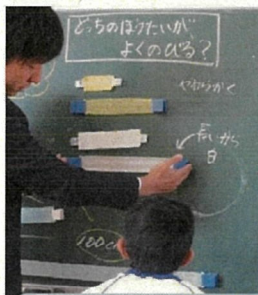
本単元では、数量の関係に着目し、2量の関係について割合を用いて比べることを通して、倍の意味について考え、説明する力を育てていく。単元末には、2種類の包帯を「基準量の〇倍」という見方を用いて、よく伸びるのはどちらの包帯かについて考察する。基準量を1とみるテープ図と数直線の図を組み合わせた図を丁寧に扱い、図と式を関連付けながら学習を進めることで理解を深めていきたい。また、問題場面を図に表したり、解決に必要な見方・考え方を働かせたりすることで、課題解決の見通しがもてるようにし、児童の思考に寄り添いながら協働的に解決する場面を位置付けたい。



たりするという、本時の課題を解決するために重要な見方・考え方を引き出すことができた。



問題1の場面
同じ種類の包帯を使って、もとの長さを替えながら伸びを予想させることで、包帯の伸びには比例関係が成り立つことが理解できた。



問題2の場面
短くてよく伸びる包帯[黄]、長くてあまり伸びない包帯[白]を提示し、どちらがよく伸びるかを考えた。初めは伸ばした後の長さだけを見て、判断していた。

伸ばした後だけ見てもだめで、伸ばす前も見ないとよく伸びるかどうか分からないんじゃない?



2 授業の実際

視点I

既習事項のつまずきを把握し、見方・考え方を働かせるための導入の工夫

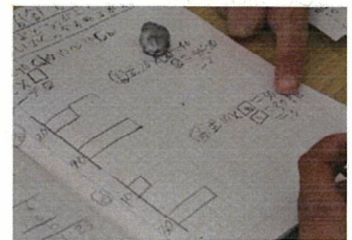
「包帯の伸びる前後の長さには比例関係が成り立つこと」、「『よく伸びる包帯』の意味」についてつまずきが予想された。そこで、その内容を児童の実態に応じ、スモールステップ方式で確認する場面を導入に設定した。その上で本時の課題となる問題3の前に、問題1、問題2について考えた。

実態に応じた段階的な導入をすることで、伸ばす前後の長さに着目したり、伸びを倍関係で捉え

視点II

絵や図に表して考えることのよさを実感するための授業展開の工夫

場面提示では、比較する2量に着目させるため、包帯の伸びの数値はあえて示さなかった。それにより、比較するためには数値が必要であることを意識させることができた。また、数値を書き加えた図の必要性につなげることができた。さらに、伸びの前後の長さを示した図を用いながら立式することで、図に表して考えるよさを実感することができた。



共有の場面では、黒板に書いた図を用いながら、

どのように解決したのかを説明することができた。A児は、振り返りの場面で「難しかったけど、図をかいたらできた」と振り返った。立式が苦手なA児にとって、テープ図を使つての立式を繰り返してきた本単元の学習は、場面を図に表して考えることのよさを感じる学習だったと言える。

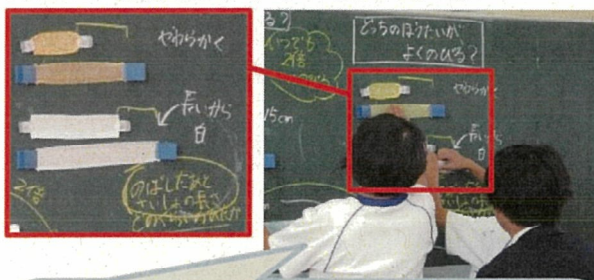


視点Ⅲ

協動的な学びを促すための教師の関わり方の工夫

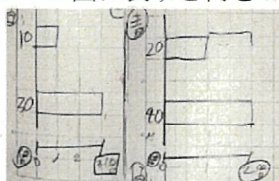
児童それぞれのつまずきを協動的に解決する場面を意図的に設定した。

導入場面の問題2では、「よく伸びる」の根拠について話し合った。何に着目して考えたのかを問い返すことで、どのような見方・考え方をを用いて考えたのかを明らかにすることができた。



A児：触ってみると、黄色が伸びる感じ。でも白の方が長いから、よく伸びるのは白かな？
 T：伸ばした後の長さを見たんだね。B児さんは何を見てよく伸びるかを考えたの？
 B児：(伸びの差を指さして)ここ！「よく伸びる」ってのは、最初と比べてどのくらい伸びたかなんですよ。

自力解決の場面で、2種類の包帯を1つのテープ図にまとめようとしたB児は、図をどのように書いて解決するのか分からなくなった。そこで、教師は、図で考えるA児のよさを見取り、A児に説明させた。すると、B児は、1つの図に表すと何を1とみる図になるのか分かりにくくなることに気が付き、2つに分けてテープ図を書くことができた。



3 子どもの変容

		文章問題が得意だ。 (問題を読んで、解決の見通しがもてる)		文章問題の場面の様子を経験 にかくとよいことがある。	
		6月	11月	6月	11月
あてはまる	4		N	N	N
まあまあ	3				R
あまり	2			R	
あてはまらない	1	R			

(考察)

「算数の文章問題が得意だ」、「絵や図をかくとよいことがある」の項目で変容が見られた。絵や図をもとに見通しをもち、問題解決をしていく学習を繰り返したり、教師が児童の思考を見取り、協動的に学ぶ場面を意図的に位置付けたりすることで、絵や図に表すことのよさを実感しながら問題解決に向かうことができるようになったと考える。

4 研究のまとめ (○成果●課題)

【視点Ⅰ】

- 実態に合わせて、解決に必要な見方・考え方を引き出すための段階的な導入を行うことは、解決の見通しをもつために効果的だった。
- 課題解決や共有の時間を確保できるよう、導入で扱う問題をより精選していく必要がある。

【視点Ⅱ】

- 絵や図を用いて解決できた経験を積み重ねていくことで、自ら図に表そうとする意識が高まり、問題解決の見通しがもてるようになっていくことが分かった。
- さらに絵や図を用いて考え、解決する力を高めていくために、これからも学習内容や単元全体を見据えた継続した指導が必要である。

【視点Ⅲ】

- 困り感を共有することで、互いのよい考えに触れながら学ぶ姿が見られるようになり、理解がより深まった。
- 児童の一人一人の考えを見取り、思考に寄り添うコーディネートを常に行うことが大切である。



実際の指導案はこちらへ▶

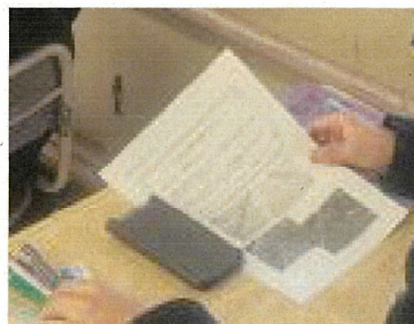
1 単元によせる授業者の思い

本学級の生徒は、真剣に課題に取り組む生徒が多くいるが、自分の考えを伝えることに関しては消極的な生徒が多い。また、レディネステストの結果からも基本がやや身に付いていない生徒もあり、関数に対しての苦手意識も強く、「解きたい」という思いが抱けない生徒もいる。考えを伝え合い、吟味することが難しい生徒も見られる。そのため、安心して自分の考えと友達考えを比較検討し、考えを吟味できるような班活動やペア学習が必要であると考えた。協力して課題解決をしたり、他者の考え方と比較したりするなど協働的に学ぶことで、学ぶ楽しさを味わわせ、数学的事象に進んで関わるができるようにしていきたい。

さらに、自分たちが学んできた関数の様々な知識を活用すれば、日常生活での課題が解決できたり、未来を予測したりすることができるという、関数の有用性を実感させたい。



- ② 自分事として捉え、課題を解決したいという意欲をもたせるために、警察官の立場として考えさせた。警察官として、現場の状況から推測させ自分の言葉で説明させることで、数学的思考を育てるようにした。



視点II

考えたことを伝えたい場の設定とコーディネート工夫

- ① 生徒のつぶやきや課題解決に対する疑問や途中までの考え、間違いなどを取り上げ生徒の思考に寄り添うことで、生徒が安心して解決できるようにし、自分の考えを伝えたいようにした。

2 授業の実際

視点I

課題を自分事として捉え、問いを引き出す課題提示の工夫

- ① 課題の事象に関連付けるため、自転車で急ブレーキをかけたときの経験を発表させ、自動車だけの問題ではなく、身近な問題であることを実感させるようにした。



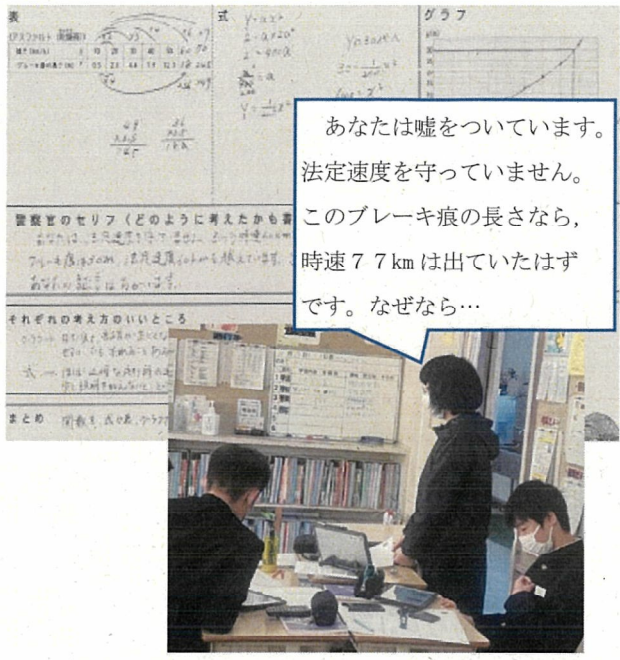
式に表せよう!

速さが2倍、3倍になると、ブレーキ痕の長さは4倍、9倍になっているよ。

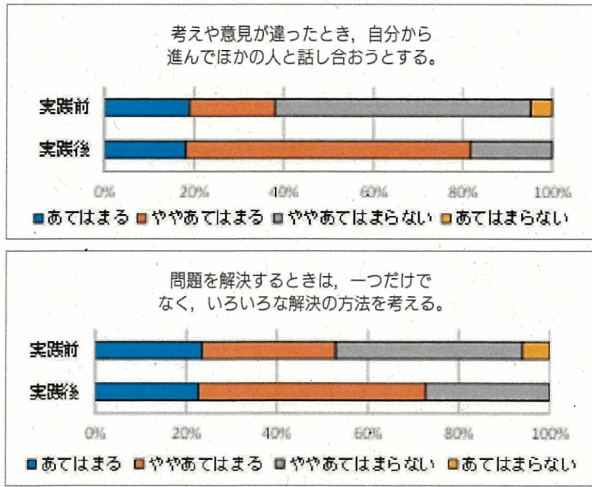
速度 (km/h)	10	20	30
ブレーキ痕の長さ (m)	0.5	2.0	4.4

スリップ痕は、なぜできるのだろう。

- ② 班や全体など、生徒の学びの状況に応じて考える場を設定することができるようコーディネートした。教師が運転手Aの役を演じることで、生徒が警察官の立場で考えて発表したいと思える雰囲気をつくり、思考を共有して問題解決へ向うようにした。



3 子どもの変容



(考察)

今までは、数学への苦手感から自分の考えに自信がもてず、少しでも考えが違っていると間違っているのかもしれないと消極的になる生徒が多かった。

しかし、興味・関心を引き出し、生徒が自分事として捉えられるような身近な事象を取り上げたことで、課題に取り組みやすくなり、解決したいという思いを強くもつ生徒が見られた。そのため、班活動において、積極的に自分の考えを説明し合い、解決しようとする姿が見られた。

班での話し合いや全体での発表の場で、表、グラフ、式の考えのよさに気付かせたことにより、自分の考え方と他の考え方を比較しやすくなった。その結果、比較して気付いたことを手掛かりに、さらに解決に向かう姿が多く見られた。互いに考え合うことで、課題解決の楽しさを感じ、安心して学ぶことができたのではないかと考える。

4 研究のまとめ (○成果●課題)

【視点Ⅰ】

- 自転車通学の生徒の経験をもとに事象と関連付けたことから、課題への興味を高め、自分事として課題を捉えることができた。
- 警察官の立場になって考えさせたことで、数値やグラフ等を関連付けて考える生徒の姿が多く見られ、意欲的に取り組むことができた。
- 身近な事象と関連付けながら課題を設定していくためには、取り上げる事象を精選し、スムーズな課題設定につなげることが大切である。

【視点Ⅱ】

- 運転手Aの証言が正しいのか、警察官の立場でセリフを考えていかななくてはならないため、ただ問題を解き解決するというだけでなく、根拠をもとに考えを他者に話す姿がみられた。このことが、数学的思考力の高まりにもつながった。
- 発表の場面では、教師が運転手Aの役をして、問い返しやゆさぶりの働きかけをしたことで、さらに考えを整理し深めようとする姿が見られた。
- 生徒のどの考えを取り上げ、考えを吟味させていくのか、さらにコーディネート力を高めていくことが必要である。
- 発表者の考え方を共有する際、ICTを活用すれば、さらに他者の考えや自分の考え方の違いに気づき、考えることができたと思える。
- 速さが変われば、それにもなつてブレーキ痕の長さ(距離)が変わるという関数の定義を、生徒の発表をもとに確認する場面をしっかりと設けるなど、教科の本質を押さえながらコーディネートしていくことも大切である。

実際の指導案はこちらへ▶



1 単元によせる授業者の思い

5学年の児童は素直で意欲的に学習に取り組むことができている。また、実験結果をもとに、ノートに自分の考えをまとめる力がついてきている。さらに、考えをノートに書き表すだけに留まらず、それを友達と共有したり、全体で発表したりできる力を高めていきたい。本単元では、全体での結果の確認の時間の後に、個人の考察の時間をあえて配置した。事実の確認を基に、自分の考えをもたせることで、自信をもって全体での交流の時間へと進んでいく。スモールステップを踏み、全児童が自分の考えをみんなの前で発表できる機会を継続して設けていけば、発表への抵抗も次第に減っていくと考える。「自信をもって発表をできた。」という成功体験の蓄積を自発的に考えを伝え合える児童の育成につなげたい。

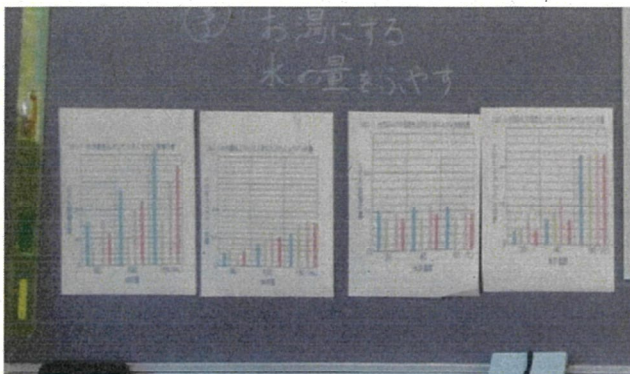


2 授業の実際

視点Ⅰ

見方・考え方を働かせながら積極的に
学習に向かう指導の工夫

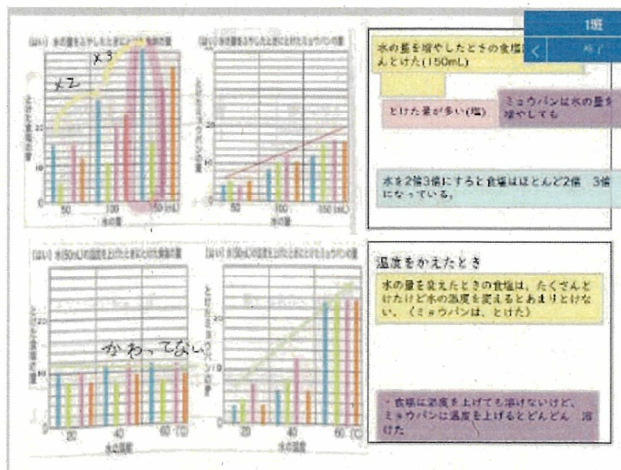
実験前後での予想と結果との乖離に着目し、本時に理解したいポイントを明確にすることで、意欲を高めることができるようにした。



視点Ⅱ

子どもが学びに没頭する話し合いの工夫

- ① 互いの考えを可視化できるワークシートを活用することで、自分の考えをさらに広げたり深めたりできるようにした。

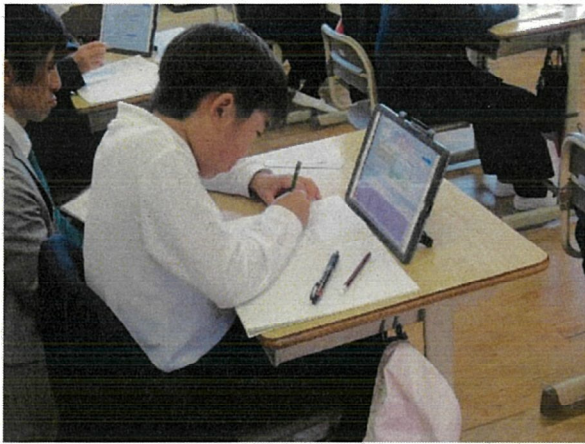


< 結果を書き込めるタブレットのグループシート >

- ② タブレットのワークシートに、気付いたことを付箋機能で集約しながら話し合いを進めることができるようにした。



- ③ ノートに自分の考えを書き込むことで、全体での話し合いに自信をもてるようにした。



視点Ⅲ

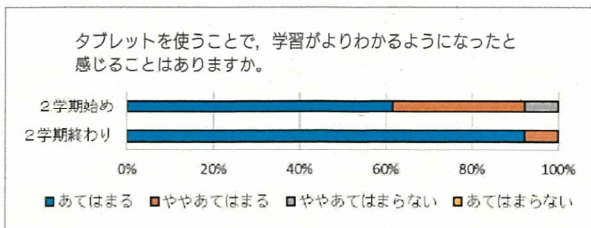
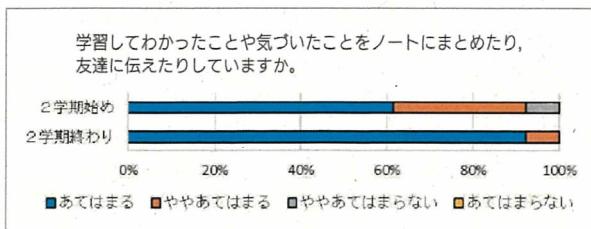
振り返りの時間の確保と観点の提示の工夫

振り返りの視点を提示し、次時につながる考えを全体に広められるようにした。

T: では、振り返りを書きましょう。なにを学んだか。しった、できた、分かった。ともだちのよいところ。もっと知りたいこと。の中から書いてください。

C: 今日は、温度を上げたり、水の量を増やしたりすることで、さらに物をとらせることを確認できました。また、Aさんの発表で考えがまとまりました。

3 子どもの変容



(考察)

- ・ ノートに考えを書き込む時間を確保することで、分かったことや気づいたことをノートにまとめたり、友だちに伝えたりする意識の高まりが見られた。
- ・ タブレットの共有ソフトを日常的に使うことで、学習がより分かるようになったと感じる児童が増えた。ノートとタブレットの使い分けが、教師も児童もできるようになってきた。

4 研究のまとめ (○成果●課題)

【視点Ⅰ】

- 前時の振り返りから本時に入ることで、全児童が見通しをもって授業に臨むことができた。
- 予想と異なる結果に対する「なぜだろう」という疑問が課題追究の意欲を高め、新たな予想とそれを調べる方法を考えるなどの深い学びにつながった。

- めあてまでの発問を精選し、よりスピーディーに導入が展開できるとよかった。

【視点Ⅱ】

- 共有ソフトを活用し、ワークシートにまとめを書き込めるようにした。互いの思考を可視化できて有効であった。

- グループ→個→全体という順番は、自分の考えに自信をもてない児童には効果的であった。

- 科学的に探究する方法を身に付けるために、まとめ(事実の確認)と考察(まとめを基にした自分の考え)を区別した話し合いができるようにしたい。

【視点Ⅲ】

- 振り返りの時間を継続することで、児童の自己の学びの状況を見つめる力が高まった。

- 振り返りを活用した結果、次時への意欲付けがスムーズにできるようになった。

- 発達段階に合った内容を意識させることで、より充実した振り返りができるようになると考える。また、教科にあった見方・考え方を振り返りの時間を使って育てていきたい。



実際の指導案はこちらへ▶

1 単元によせる授業者の思い

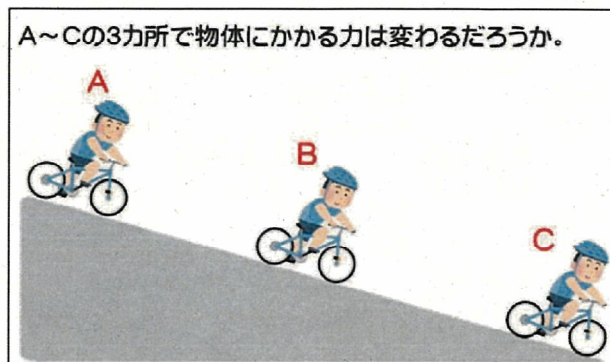
生徒は、普段の授業において実験に意欲をもって取り組む様子が見られる。一方で自ら課題をもつことや、実験結果からその規則性を見出したり、自分の言葉で表現したりすることを苦手とする生徒が多い。

本単元では、身のまわりの運動やエネルギーの現象について科学的に探究する中で観察・実験を通して運動の規則性を見出せるよう指導する。また、できるだけ身近な現象の中から課題を発見させ、理科の学習を普段の生活の中の現象と関連付けて考える習慣を身に付けさせたい。さらに、観察・実験の場面ではデジタル教材を活用し、結果の処理を簡潔にして、考察の時間を確保することで、自分の考えを述べたり、互いの意見を聞き合ったりして、より深く学ぶ姿勢を育てたいと考える。



理科

- ② ゆさぶりをかける課題を提示することで、生徒の知的好奇心をくすぐる工夫を行った。



< パワーポイントによる課題の提示 >



< 実験の様子 >

2 授業の実際

視点 I

生徒が目的意識をもって観察・実験を行うための課題設定の工夫

- ① 下り坂の自転車を例として、日常生活と関連付けさせることで、学びを自分事として捉えやすくした。

ブレーキを離して、ペダルをこがないとき、この後、自転車はどんな運動をするだろう。



視点 II

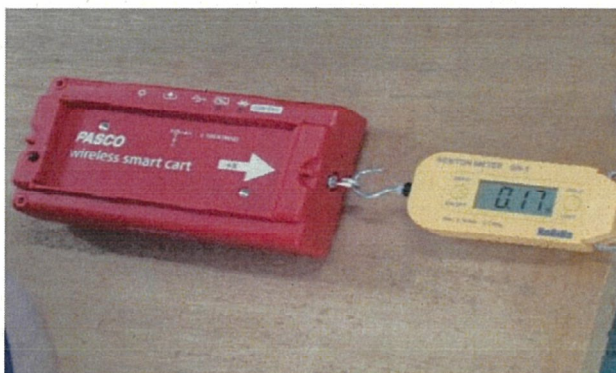
生徒が実験結果や他者と意見を共有し、協働的に課題を解決するための工夫

- ① 共有ソフトを活用して、個の考えを全体で共有できるよう工夫した。その際、タブレット上に記入させると入力の変速に個人差が生じてしまうため、ワークシートに記入したものをタブレットで撮影し、アップロードさせる方法をとった。

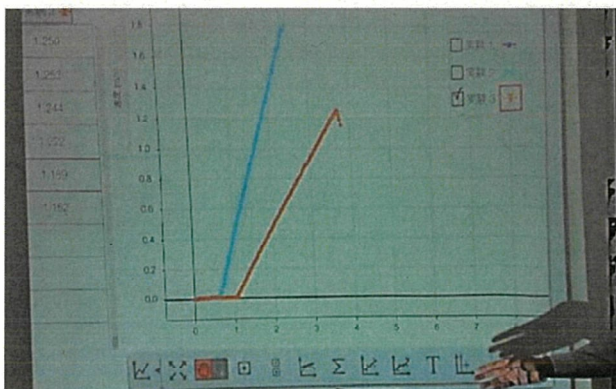


教師用タブレットの画面（モニタ機能）
生徒の考えを即座に確認することができる。

- ② デジタル機器を活用し、実験結果を視覚的に捉えやすくするとともに、データ処理の時間を短縮し、他者との意見交換の時間の時間を確保した。



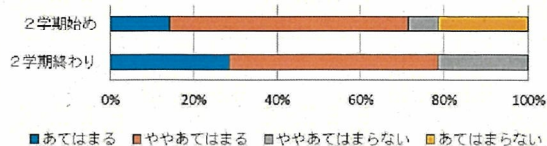
＜ デジタル力学台車（左）と
デジタルニュートンばかり（右） ＞



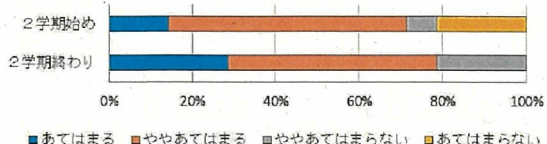
アプリと連動させることで、台車の運動の記録を即座にグラフ化させることができる。

3 子どもの変容

課題解決のために、他の人やグループの人達と協力することができる。



難しい問題でも誰かと協力し合えば、解決することができる。



〈考察〉

実験や日頃の言語活動等の協働的な学びを通して、課題解決のために他者と協力することや、難しい課題についても協力して解決しようとする意識が高まった。反面、下位生徒は上位生徒の考えに頼ってしまう傾向があり、自分の言葉で考えて表現する力の育成が必要であると感じた。

4 研究のまとめ（○成果●課題）

【視点Ⅰ】

- 身近な課題を取り上げたり、知的好奇心を揺さぶる課題を提示したりすることで、生徒の課題解決に対する意欲が高まった。
- 提示する課題にあいまいな部分があったために、生徒は何について調べたいのかかわからず、迷いが見られる場面があった。比較する要素を絞って調べるのが大切だと感じた。

【視点Ⅱ】

- ICTの活用やデジタル力学台車を用いることで、協働的かつ効率的に実験結果を処理することができ、生み出した時間で一人一人が自分の考えをもち、意見交流により課題を解決することができた。
- 共有ソフトを活用して共有した生徒の意見を教師が読み上げてしまうことで、生徒の発表の機会を奪う結果となってしまった。

生徒自身に発表させることで、自分の考えに責任をもたせる指導の工夫が必要だと感じた。

実際の指導案はこちらへ▶



「会話のゆくえ」

児童が多様な価値観に触れ、自分の生活や内面を見つめ直すことができる授業

二本松市立渋川小学校 本田 政史

1 教材によせる授業者の思い

本学級の児童においては、学校生活において善悪の判断に大きな問題はないように感じるが、児童一人一人の内面は不透明で、様々な心の揺れや葛藤を経験していると考え。

とりわけ、情報モラルについては、チャット等に関心をもつ児童も多く、判断の誤りや考えの食い違い等、今もこれからも経験することが多いと考える。

本教材が描くチャット場面での仲間外れや中傷につながりかねない言動について考え、自己を見つめさせていくことは、極めて有意義なことと考える。

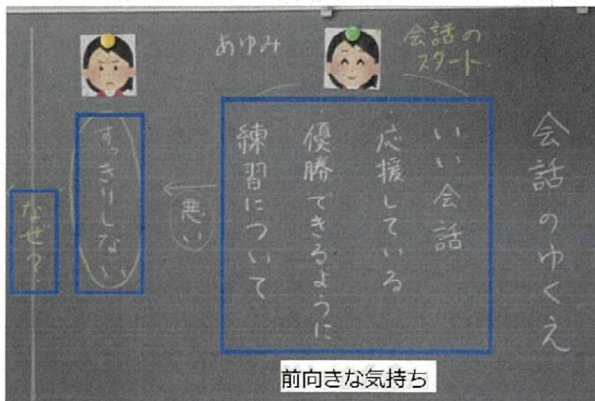


2 授業の実際

視点 I

多様な価値観を表出させ、様々な考えに思いをめぐらせる発問の設定

- ① チャット当初、楽しく前向きにコンクールへの思いを高めていた主人公が、会話が進むにつれてすっきりしない心情に変わったことについて、「どうしてなのか?」と問いかけた。

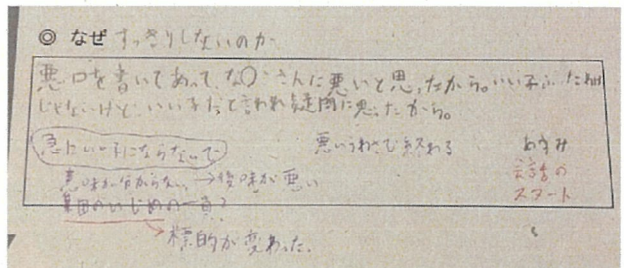


- ② 中心発問で、葛藤場面において気持ちがすっきりしない理由を問い、児童が多様な考えをもつことができるようにした。

<「なぜすっきりしないのか」という問いかけに対して>

- ・ 自分が出した話題が、個人を中傷するチャットになってしまっていたから
 - ・ 自分も責められる対象になったから
 - ・ 自分のコメントで会話が途絶えたから
- など

- ③ 友達の考えに共感できるか問いかけ、他の考えを引き出しながら、「あゆみさんは悪口を言っているのか」「もともとどうい話だったのか」など、教師からゆさぶりをかけて考えを深めさせた。



<友だちの考えを書き加え(青)新たな考えを書く>

- ④ 主人公が正しい行動ができていたかどうか、中心発問後に問いかけ、表現された児童の考えを受容した。

児童 A: アイディアを全体に募集しなければよかった。

児童 B: 一人に対してじゃなく全体へのアイディアなら。

視点Ⅱ

道徳的価値に関するエピソードや葛藤経験などを表現させる場の設定

- ① 導入場面において、本時のテーマ「正しいと思うことがいつでもできるか」について考えさせた。4段階で自己評価するとともに理由も書かせることで、今現在の自分を見つめさせた。
- また、児童の発表を通して、友達の考えに触れるようにした。

正しいと思うことが、いつでもできますか。

1 2 3 4

できない できる

理由

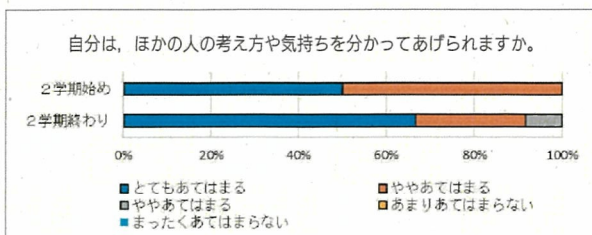
正しいとはいつでもできるわけではなく、正しいことなのかも知れないことがあるから。

- ② 「主人公のように友だちとの間でモヤモヤした」「正しいと思うことができてモヤモヤしなかった」などの経験を想起させた。
- 発表の際には、友達が話した経験に共感できるかといった視点をもたせ、聞く側に自分の経験につなげて考えさせ、深く見つめさせるようにした。

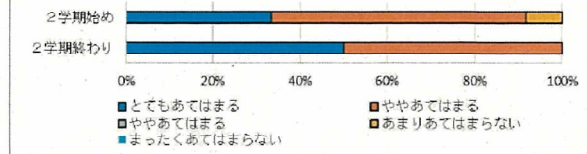
他の人と意見が食い違ったので自分は引き下がったけど、結果的に自分の考えが正しいことが分かってモヤモヤしました。



3 子どもの変容



道徳の時間には、これまでの自分の行動や経験についてじっくりと振り返ることができていますか。



〈考察〉

友達が表現する多様な価値観に触れて類似や相違を感じながら理解することは、自己理解の第一歩と考えられる。アンケートから他の人の考えや思いを分かろうとする気持ちが育っていることがうかがえる。このことは、道徳科における話し合いの充実の成果と言える。

また、視点Ⅱとして、自分の経験を振り返り、自分事として捉える場を大切にすることで、児童が道徳科の授業スタイルに慣れ、自分の経験を自然と関連付けられるようになってきた。アンケートから児童の意識の向上が見てとれる。

4 研究のまとめ（○成果●課題）

【視点Ⅰ】

- 児童から迷いや葛藤を生み出し、多様な考えを表出させる中心発問の設定を第一に考えた。そのことを起点に、導入はどうあるべきか考え、後段ではどのような経験を想起させて自分事として捉えさせるかなど、児童の考えをきっかけにしてすべてを連携させた授業づくりを心がけた。

- 自らの生活や内面を振り返って表現する場面で、児童同士が共感し、思いがつながる場面があった。そのような場면을意図的につくり、教師がそれを揺さぶってさらに深めさせる立ち位置をとりたい。

【視点Ⅱ】

- 「主人公のように〇〇した経験はないか」と問いかけたことで、主人公が自分とつながり、進んで自分の経験を想起し表現することができた。
- 児童の思いや考え、経験を整理して児童に投げかけ、より効果的にゆさぶる教師のコーディネーターが大切である。

実際の指導案はこちらへ▶



「よりよいクラス活動を目指して」
ねらいとする道徳的価値に関する問題場面を自分事として捉え、
よりよい自らの生き方に思いめぐらせる生徒の育成

二本松市立二本松第三中学校 大沼 仁

1 主題によせる授業者の思い

本主題で扱う「集団生活の充実」について、本学級の生徒は、入学当初はぎこちなかったものの、活動を重ねていく中で、級友と協力して取り組むことができています。

しかし、学級全体で活動する中で集団のことを考えない行動が見られたり、自分の考えを優先させてしまったりすることがあった。また話し合いの場面では、相手の話を理解しようとせず自分の意見を無理に通そうとして雰囲気が悪くなることもあった。

授業構想に当たり、立場や考え方が違う二人組の登場人物の会話部分を焦点化し、グループで意見交換させる中で自分の考えを広げさせたい。その際、相手の意見をしっかりと聞くこと、自分の意見を分かりやすく伝えることに留意していく。活動する中で、自分の経験を振り返り、よりよい集団を送ることに思い巡らせる態度を育成したい。

- ② 登場人物のやりとりを自分事として捉えさせ、意見の違う登場人物それぞれに共感できる理由、共感できない理由をワークシートにまとめさせる。その際、「少しは共感できる（共感できない）」部分についても意見をまとめるよう支援する。

〈真美・由紀に共感した生徒の考え〉

- 話し合いで決めたことは守るべきだ
- 車いすのためにがんばるのは正しい

〈圭司・悟に共感した生徒の考え〉

- 大切な大会が近い、しかたない
- できることはやっていると思う

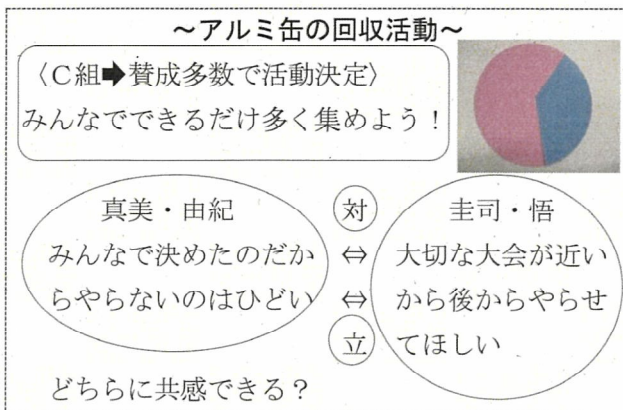
- ③ 初めは、自分と立場や考え方が同じ生徒同士で集まり、意見交換をさせ、それぞれの考えを交流させる。続いて、自分とは違う立場や考え方もつ生徒同士で集まり、交流させる。自分の意見と友達の意見の類似点や相違点を比べながら、多面的・多角的に考えられるようにする。

2 授業の実際

視点 I

教材の問題場面を焦点化し、自分事として考えさせる活動の設定

- ① 考え方が異なり、対立する登場人物の構図を示し、どちらの立場に共感できるか心情円を使って考えさせる。



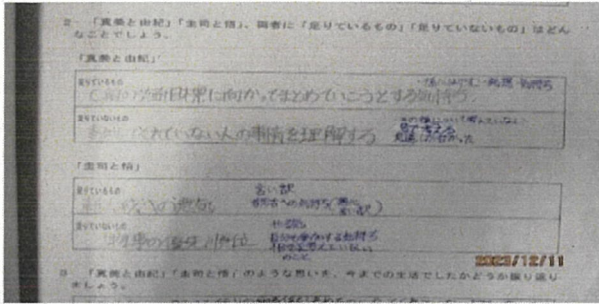
〈生徒の感想から〉

- ・ 共感できる立場は同じでも理由が違って、話し合うのが面白かった。
- ・ 自分と考え方が違う人の理由を聞くことができてよかった。

視点Ⅱ

自分のよさや至らなさに思い巡らせる 発問や活動の工夫

- ① 二つの違う立場をとる登場人物に、それぞれ足りているところ、足りていないところについて考えさせ、問い返しをしながら生徒の考えを揺さぶる。



- ② 自分の生活を振り返り、登場人物と似かよった経験があるかどうか、その時どんなことを考えたか振り返らせる。



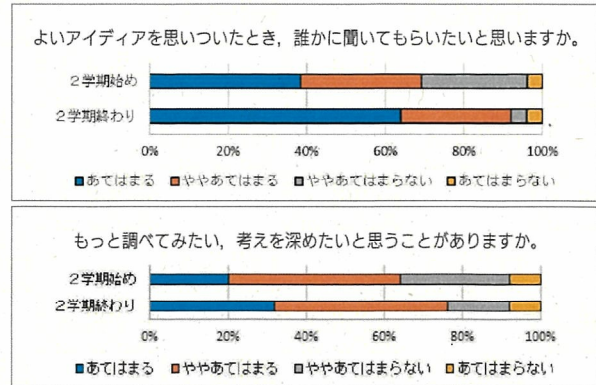
〈生徒の感想から〉

- ・ グループ活動時、やらない人がいて嫌な思いをしたが、どうしてやらなかったのか理由を聞いてしっかり話し合うべきだった。
- ・ 文化祭のクラス発表の話し合いでは、勝手に話す人もいて全体でよい発表にしようとしていなかった。みんなが納得できるようなものにしたい。

〈文化祭終了後の生徒の感想から〉

- ・ 文化祭は、周りの仲間と協力して活動した。クラス発表も、みんな目標をもってがんばり、いい活動になったと思う。楽しかった。

3 子どもの変容



〈考察〉

- ・ 多くの生徒が自分の意見を誰かに聞いてほしいと思い、意欲的に意見を伝え合うことができた。
- ・ 授業で学習したことについて、もっと調べたい、考えを深めたいと思う生徒が増えた。
- ・ 2回の調査とも「あてはまらない」と答えている生徒がおり、個別の支援が必要である。

道徳科

4 研究のまとめ (○成果●課題)

【視点Ⅰ】

- 登場人物に共感できるかできないか心情円を使って考えさせたが、視覚化することによって立場や心の迷い、葛藤を明確にすることができた。
- 登場人物の立場や考え方に思い巡らせて話し合いを進め、「自分だったら」の視点で考えることができていた。
- 登場人物の関係をもっと単純化し、そこから話し合う内容を焦点化していく必要があった。
- 生徒の意見(つぶやき)をしっかり見取り、問い返しをしていく中で考えを深めさせ、ねらいに迫らせたかった。

【視点Ⅱ】

- 自分の生活を振り返り、見つめる活動を通して、本授業の前よりも日常生活においてよりよい集団生活を送ろうと考える生徒が増えた。
- 自分の生活を振り返り、足りているもの、足りていないものについて授業の中で挙げさせながら全体で共有し、投げかけるべきだった。

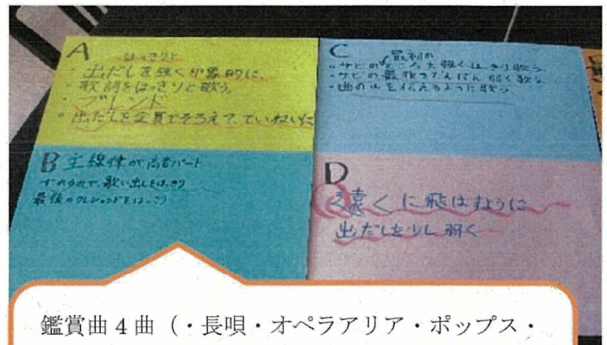
実際の指導案はこちら▶



1 題材によせる授業者の思い

本学級の生徒は、合唱コンクールに向けて意欲的に練習に取り組んでいる。校内合唱コンクールは1年生にとって初めての行事になるため、イメージがもてない生徒も多いが、練習してきた成果を保護者・全校生徒の前で発表できることを楽しみにしている生徒も多く、自信をもって発表できるよう支援していきたい。生徒の歌唱表現を創意工夫する過程を大切にしながら、生徒の思考の流れを把握し、生徒それぞれの思いをつないで、学級の歌いたい歌として表現していけるようコーディネートしていきたい。本題材では、校内合唱コンクールに向けた曲の練習を通して、楽曲に対する自分のイメージを膨らませたり他者のイメージに共感したりして、音楽を形づくっている要素を知覚しながら、表したい歌唱表現について考え、歌唱について思いや意図をもって学習活動を進めることをねらいとしている。

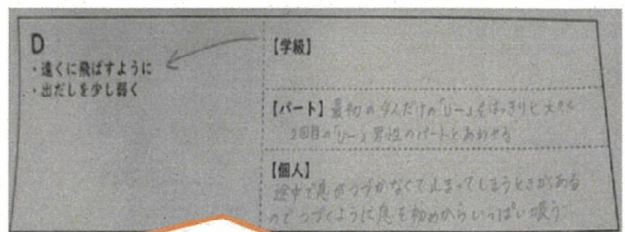
- ② 学級で表現したい曲のイメージに近づくために、合唱曲を曲想の異なる4つの部分に分け、それぞれの歌い方について、鑑賞曲を参考に意見を出し合った。
(題材構想第1次)



鑑賞曲4曲（・長唄・オペラアリア・ポップス・祈りの歌）のうち、Dの歌い方は、祈りの歌の長く息を使うイメージで歌いたいね。

- ③ 見方・考え方を働かせながら合唱曲を練習していく段階においては、学級で表現したい曲のイメージに近づくために、本時で取り組む課題をパートや個人ごとに設定し、一人一人が学習課題を自分事として捉えられるようにした。

(題材構想第2次)



Dの部分の例

【学級で話し合った表現の目標】

- ・遠くに飛ばすように歌おう。

【パートの表現の目標】

- ・最初の4人だけ、「Uh～」をもっと大きく歌おう。

【個人の表現の目標】

- ・主旋律との音量のバランスに気を付けたい。

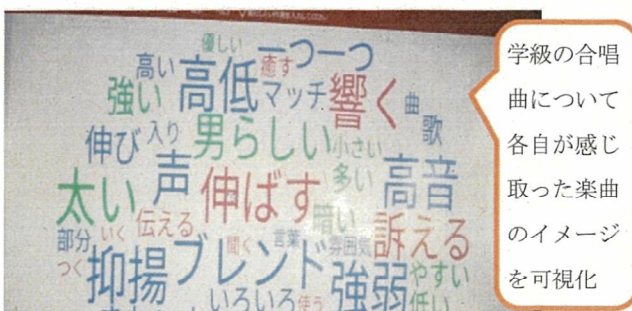
2 授業の実際

視点 I

学びを自分事として捉える指導の工夫

- ① 歌いたい曲のイメージについて生徒一人一人に考えさせ、その思いをAIを活用して可視化し、イメージを共有しやすくした。

(題材構想第1次)



学級の合唱曲について各自が感じ取った楽曲のイメージを可視化

視点Ⅱ

課題解決に向けて、協働的に学び合う指導の工夫

- 自分の考えと他者の考えから、表現したい曲のイメージに近づくために、発声（声の響かせ方）や歌い方（歌詞の表現や強弱などの表現の工夫）の2点に着目して工夫させ、ふさわしい音楽表現を学級全員で作りに上げていくことを実感させた。（題材構想第2次）

音量や音のバランスを考えながら歌うと曲の雰囲気が変わってくるね。歌いたいイメージに近付けよう。

音量のバランスをとるにはどうしたらいいかな。



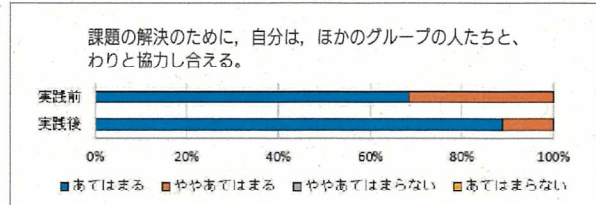
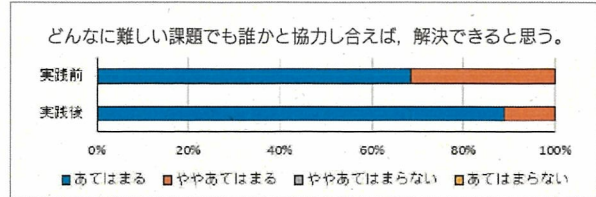
顔より高い高さを意識して音をぶつけて歌うと音が響いてくるね。

歌う時は、声を遠くに飛ばすようにすると声量が大きく聞こえるね。

【生徒の振り返りから】

- 今日は意見を出し合ってDの部分の歌い方を少しずつ話し合って変えていきました。音量やバランスを考えながら歌うと曲の雰囲気が変わり歌いたいイメージに近づくことができると分かりました。
- 話し合いながら歌い方を変えることで主旋律が聞こえるようになり学級でイメージした歌い方に近づいてきました。指揮者としてイメージを大切にしながら頑張りたいと思いました。

3 子どもの変容



〈考察〉

あてはまると答えた生徒の割合が増加した。粘り強く課題解決に取り組むとともに、協働的な学びの導入により、互いのよさを受容し、認め合う姿が見られた。

4 研究のまとめ（○成果●課題）

【視点Ⅰ】

- 歌いたいイメージを学級で共有してから歌唱練習をさせたことにより、改善の視点が明確になり、課題を自分事として捉え、課題解決に向かう姿が見られた。

- 題材構成の再考や単位時間において繰り返し歌い込むことができるよう、タイムマネジメントを工夫する必要がある。

【視点Ⅱ】

- 表現したい曲のイメージに近づくために、視点を与えながら課題解決に向けて取り組ませたことにより、視点を明確にして自分の考えと他者の考えを共有しながら、学級全員で作りに上げることができた。また、視点を基に評価し合うことで達成感を感じながら練習に取り組む姿が見られた。

- 学級でも、生徒同士で意見交換を行いながら、自主的に楽曲を練習する姿が見られた。

- 生徒が働かせた「見方・考え方」を見逃すことなく、注意深く見取り、称賛したり広めたりして「深い学び」へと導けるよう教師のコーディネータ力を高めていく必要がある。

実際の指導案はこちらへ▶



「ゴール型ゲーム ～フラッグフットボール～」

子どもが、自ら課題を見つけ、解決に向けて熱中して取り組むことができる授業

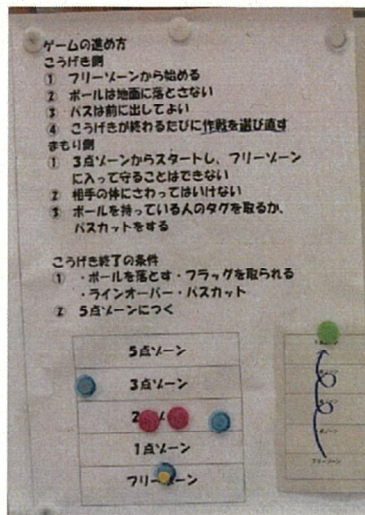
二本松市立東和小学校 渡邊 康貴

1 単元によせる授業者の思い

本学級の児童の多くは運動が好きで、休み時間になると友達を誘ってボール遊びや鬼遊びなどを好んで行っている。体育のグループ学習は、仲良く学習することができるが、勝負事になると児童同士でもめてしまうこともあった。

フラッグフットボールは、「速く走る」「パスを捕る」の運動能力だけでなく、「作戦を考える・分析する」など、考えて動くスキルが求められる運動である。

単元を進めるにあたっては、必ずみんなで話し合い、「作戦」と「それぞれの役割」を決めさせ、作戦を立てる際には、作戦ボードや学習カードを活用させる。オフェンスに有利な条件（3対2）でのゲームを中心に進めていくことで成功する可能性を高くし、達成感が味わえるようにしたい。各チームが夢中になって話し合ったり、試行錯誤しながら動き合ったりすることで、友達のよさに気付いたり、思考力を育んだり、クラスに一体感が生まれたりすることができるようにしたい。



ゲームの進め方について、児童の考えをシートに反映させて拡大コピーし、提示した。

児童から出てきた意見

- ・ 攻撃が終わるごとに作戦を考えるようにする。
- ・ 攻撃の時間を5分と決めてその間は何回攻撃してもよい。
- ・ 相手にはふれないようにする。

② 作戦ボードを使うことで、自分がどのように動けばよいか、動きをイメージすることができるようにした。

2 授業の実際

視点 I

見方・考え方を働かせながら、学びを自分事として捉える指導の工夫（教具・ルール・場作りの工夫）

① めあて・学習の流れ・ルール等を掲示し、学習の見通しが持てるようにした。ゲームの進め方については教師が提示し、授業を進めていくなかで、児童から出たルールの工夫や改善点を積極的に反映させた。



ぼくが、右から走るから、相手のブロックをおねがい。

ボールを持っているふりをしてバラバラに走るよ。



視点Ⅱ

次の学びにつながる振り返り (ICTや学習カードの活用など)

- ① 前時のメインゲームの映像を提示することで、うまくいった動きや作戦について意見を出そうができるようにした。



誰がボールを持って走っていたのか、分かったかな？

- ② うまくできた作戦を取り上げるとともに、友達に自分の考えを伝えていた児童を取り上げ、全体で学びの価値付けをした。

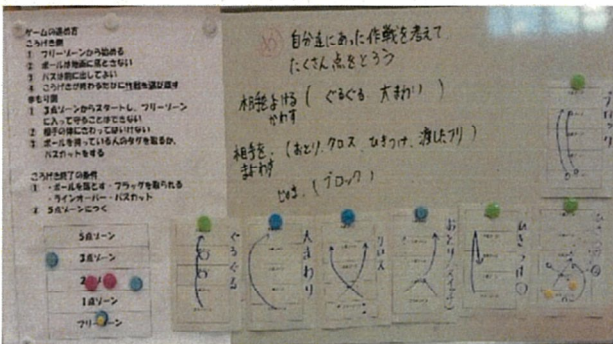
ボールを持っているときに、味方にどこにいてほしいか伝えることができたよ。



< 児童の振り返りから >

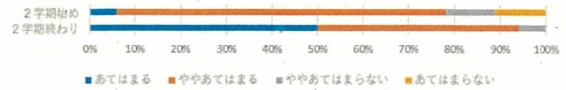
- 相手をかかわして進むことができた。次は5点取れるようにしたい。
- 新しい作戦で相手をだますことができた。
- ちがう班の作戦をやって楽しかった。
- ランで得点することができた。パスで得点を取れるようにしたい。
- 試合には負けたけど、自分たちの立てた作戦が成功したので楽しかった。

< 本時の板書 >

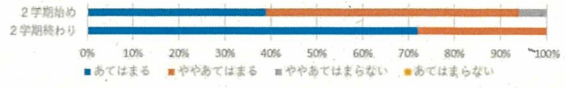


3 子どもの変容

友だちに伝えたい、友だちの考えを聞きたい、と感じたことはありましたか。



授業でできるようになったこと、わかったことはありましたか。



(考察)

アンケートの結果から、自分の考えを伝えたり、友達の考えを聞いたりしたいという思いが高まってきていることや、授業でできるようになったことがあるが増えてきていることが明らかになった。単元を通して、児童が課題に対して話し合ったり、得点の喜びを感じたりしたことで、勝敗に関わらず、達成感を味わうことができたのではないかと考える。

4 研究のまとめ (○成果●課題)

【視点Ⅰ】

- 攻撃の時間を多く確保したことで、児童は、たくさん攻撃できるように動き、運動量を確保することができた。
- 活動量を多く確保したため、作戦を考える時間が短くなってしまった。攻撃の回数をチームの人数分にして、作戦ボードをタブレットで撮影記録をすることで、思考の足跡を残して振り返りや作戦を選択する手助けになるようにしたい。

【視点Ⅱ】

- 学習カードを活用したことで、グループでの取り組みや自分の取り組みに対して課題を明確にすることができた。新たな学びへの意欲を確認することができた。
- 学習カードに記入したことをタブレットで撮影し、共有ソフトに貼り付けたり直接書き込んだりすれば、振り返りを学級で共有できた。また、自分の反省をタブレットで撮影して共有させたりすると、時間短縮にもつながると考える。

実際の指導案はこちらへ▶



「健康な生活と疾病の予防，体づくり運動」

健康課題を自分事として捉え，ペアと協力して課題解決に向けて主体的に取り組む授業

二本松市立二本松第一中学校 草野 洋一

1 単元によせる授業者の思い

本学級の生徒は，積極的に学習や運動に取り組む生徒が多く，自分の考えを整理して発表できる。また，友達と協力し，運動を楽しみながら行うことができる。また，タブレットの操作に慣れており，タブレットを活用した調べ学習もできる。

単元に関わることとしては，「自分は健康である」という意識から，かかりつけの病院を知らない，自分の健康に興味を示さない等の生徒が多い。本研究では，2つの単元を通して，医療機関の種別や適切な医療機関の利用について学び，自分自身の健康について考えさせるきっかけとしたい。また，二本松市の健康問題について考える保健の授業の後に，体づくり運動の授業で，自身が考案した運動の検証を行うようにし，保健分野と体育分野の内容を連動させることで，適度な運動の必要性を感じながら，主体的に取り組めるようにしていきたい。



2 授業の実際

視点Ⅰ

見方・考え方を働かせながら学びを自分事として捉える指導の工夫

- ① 二本松市や福島県の資料を積極的に活用し，課題を身近な問題としてとらえられるようにした。また，自分の将来として「自分だったらどうするか」を常に考えて授業に参加させた。



将来，自分はどうな運動をしようかな？

- ② 教師の祖母の話から，学びを自分事として捉え，自分の将来や家族の将来をイメージし，課題解決に向けての動機付けとした。



先生の祖母は，脳梗塞で，半身不随でした。血管がもろくなっていたのかも。

視点Ⅱ

互いの考えを聞き合い協働的に学ぶ指導の工夫

- ① 授業の終末には，ペアの動きと自分の動きを振り返る時間を設定した。ペアを観察する視点をもたせることで，自他の動きを相互評価する場とした。今回の授業だけでなく，1年間通してペアの動きを振り返る時間を設定した。



高齢者はここまで手を挙げる事ができる？

- ② 調べ学習では，積極的にタブレットを使用して，調査をした。その際，ペアで調査する役割を分担した。また，調査結果を聞き合う場面では，相手の考えをくわしく聴くようにした。

職場の運動はイスが有効だね。



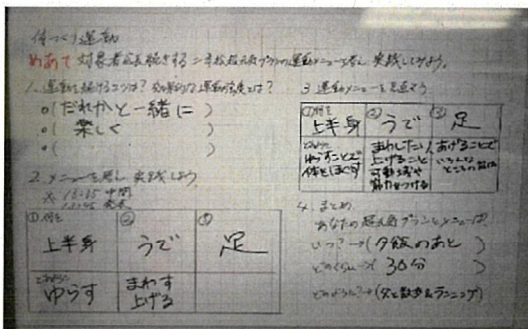
視点Ⅲ

生徒のつぶやきを共有化させる指導の工夫

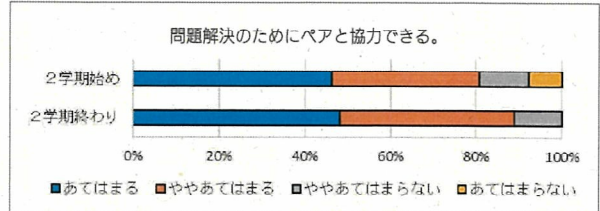
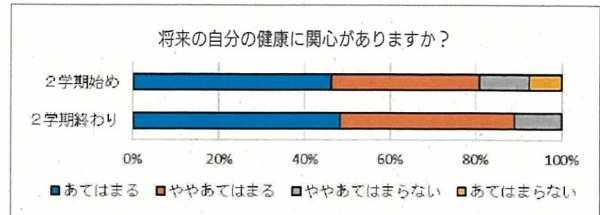
- ① タブレットを活用して、生徒のつぶやきや感想を収集した。収集した情報を教師が判断し、全体に共有が必要な場合には、全体で共有した。



- ② タブレットを活用して、運動を長く続けるコツや高齢者向けの運動メニューをインターネットで調べたり、班員で話し合ったりして作成した。



3 子どもの変容



〈考察〉

将来の自分の健康や二本松市民の健康を考えたことにより、生徒の健康意識が高まったように思う。また、ペア活動を取り入れたことにより、ペアの関係が良好となり、課題解決に向けて協力して活動に取り組む様子が、多く見られるようになった。

4 研究のまとめ (○成果 ●課題)

【視点Ⅰ】

- 「将来、仕事を続けるためにも運動は大切」と答えた生徒が多かったことから、健康について自分事として捉えていたことが分かる。
- 高齢者等の実態が実感できず、自分以外の健康について考えることは難しいという感想があった。

【視点Ⅱ】

- どの授業内容でも、ペアの観察の視点を設けたことにより、協力して課題を解決する場面が多く見られた。
- 人間関係によって協動的な学びが停滞する場面が見られた。ペアの編成に工夫が必要である。

【視点Ⅲ】

- タブレットを活用することにより、意図的な指名ができた。また、大きな声で自信をもって発表する生徒が多かった。
- 運動量が十分に確保できたかについて疑問が残る。タブレットの活用については、引き続き考えていく余地がある。



実際の指導案はこちらへ▶

「けんこうな生活」

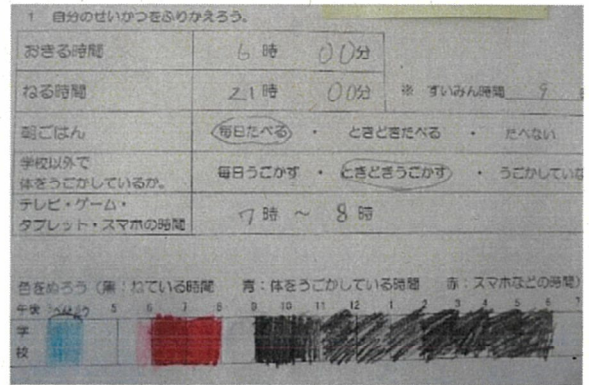
子どもが健康な生活についての知識を活用して、実践しようとする授業

二本松市立石井小学校 阿部 理佳

1 単元によせる授業者の思い

本学級の児童は、休み時間には元気に外で遊ぶ姿が見られ、6割の児童がスポーツ少年団やスイミングなどの習い事で運動をしている。食事については、朝食はほとんどの児童が食べている。給食では偏食の児童が多く、残食が多い傾向にある。睡眠については、ほとんどの児童は8～9時間程度の睡眠時間を確保しているが、スポーツ少年団の活動で就寝時間が遅くなる児童もいる。

本単元では、「運動」「食事」「休養・睡眠」がそれぞれバランスよく関わり、つながり合うことで健康な生活が送れることに気付かせたい。「運動」「食事」「休養・睡眠」のどれかひとつでも改善すると、他の生活習慣によい影響を与えることについても理解できるようにしたい。また、健康な生活を送るために必要なことは知識として理解している児童は多いが、自分の生活と結び付けて考え、実践している児童は少ないという実態を踏まえ、今までの自分の生活を振り返り、自分でできることを考える活動を通して、日常生活での実践意欲を高めていきたいと考える。



- C: スポ少で寝るのが遅かったからちょっとしか寝られなかった。
- T: 自分の生活は見直したほうがいいかな。このままの生活でいいかな。
- C: もうちょっと早く寝る。
- C: ゲームをやり過ぎている。
- C: もうちょっと体を動かす。



2 授業の実際

視点Ⅰ 学びを自分事として捉える指導の工夫

1日の生活スケジュールを記入し、可視化することで、学習課題を自分事として捉えさせた。

【自分の生活を振り返り感じたことを発表する】

- T 自分の1日の生活を振り返ってどう思いましたか。
- C: 意外と寝るのが遅かった。
- C: 意外とテレビを観ている時間が多かった。3時間ぐらい。

視点Ⅱ 実践につながる振り返り

実現可能な具体的な目標を決めてチャレンジカードに記入することで、日常生活の実践につなげた。

【チャレンジカードに記入した目標】

- スマホを見る時間が長いから、30分にする。
- バスケットボールが終わった後はテレビをあまり見ないで、早く寝るようにがんばる。

- 30分目安にして体を動かす。食事をたくさんとるためにおやつを食べない。休養をとったり、睡眠をたくさんとったりする。
- ゲームの時間を30分減らす。なわとびをして体を20分動かす。
- 体を動かす時間をもっと増やして、夕ご飯を残さずに食べる。スマホを見ている時間を10分減らす。

＜チャレンジカードの振り返りから＞

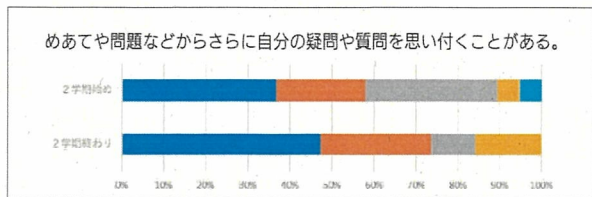
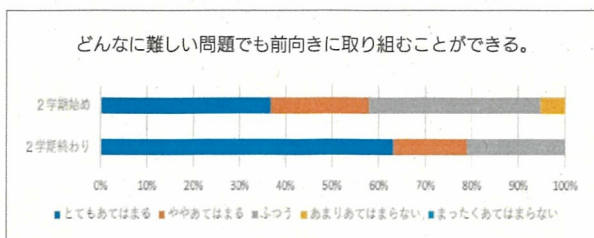
2 毎日をふりかえろう (※ ◎…元気いっぱい ○…元気 △…元気がない)	今日の体調は？ (○でかこむ)	ふりかえり (自分の振り返りができたかな？)
9月23日(土)	◎ ◎ △	17時に寝た
9月24日(日)	◎ ◎ △	17時に寝た
9月25日(月)	◎ ○ △	9時に寝た
9月26日(火)	◎ ○ △	9時に寝た
9月27日(水)	◎ ◎ △	17時に寝た

ふりかえろう (※ ◎…元気いっぱい ○…元気 △…元気がない)	今日の体調は？ (○でかこむ)	ふりかえり (自分の振り返りができたかな？)
23日(土)	◎ ○ △	体を動かす時間を減らしたからごはんをたくさん食べた
24日(日)	◎ ◎ △	体を動かす時間を減らしたからごはんをたくさん食べた
25日(月)	◎ ◎ △	スマホを見ている時間を5分しか減らさなかった
26日(火)	◎ ○ △	スマホを見なかつたのでできました
27日(水)	◎ ○ △	体を動かすことを減らさなかつた

おうちの人以上
ゲームをするよりもほかのバドミントンやボールを使って、元気に遊んでおうちの人と遊べました。

3 おうちの人から
頑張っていることができて、おうちの人から褒められるようになってほしいです。

3 子どもの変容



〈考察〉

「どんなに難しい問題でも前向きに取り組むことができる」という設問では、「とてもあてはまる」児童の割合が大きく増えた。「めあてや問題などからさらに自分の疑問や質問を思い付くことがある」という設問では、「とてもあてはまる」と「ややあてはまる」児童の割合が増え、「まったくあてはまらない」児童がいなくなった。また、チャレンジカードの振り返りに「9時に寝られた」「できました」等の生活習慣の改善を実感している記述が見られた。日常生活での実践意欲を高めることができたように思う。

4 研究のまとめ (○成果●課題)

【視点Ⅰ】

○ 1日の生活スケジュールを記入し、睡眠時間や運動の時間、メディアの時間に色をつけることで、1日の生活の中でどのくらい割合が占めているか、客観的に把握することができた。自分の生活を振り返り「寝るのが遅い」「テレビを見る時間が多かった」などの発言があり、自分に関係ある課題であることの意識を高めることができた。

● 児童の考えに対し、教師のみが承認する場面が多くあった。児童から広げて考えを深める場面があってもよかった。児童と児童の考えをつなげ考えを深める問い返しを工夫していきたい。

【視点Ⅱ】

○ チャレンジカードに「運動を30分する」「ゲームの時間を30分減らす」など記述があり、具体的な目標を決めて実践することができた。また、「今日は運動して、ごはんをたくさん食べたから元気だった」と記述があり、体調が生活習慣と関係していることを実感している様子が見られた。

● 自分と友達のスケジュールを比較して、意見を交流する学びの場を設定すればよかった。

体育科(保健)



実際の指導案はこちらへ▶

「Unit5 Where is the post office ?」

目的意識をもって外国語とかわかり、学習した表現を生かして話したり聞いたりする児童の育成

二本松市立杉田小学校 山寺 晶子

1 単元によせる授業者の思い

本学級の児童は、授業の様子や振り返りの記述から、「英語をすらすら話したい。」「友達に伝わるように会話ができるようになりたい。」と目標をもって取り組んでいる児童が多いといえる。

一方で、学習でつまづいた時や解決方法が見つからない時に「自分には無理だ。」と思い、課題に取り組むことをあきらめてしまったり、自分の取り組みに自信がもてなかったりする姿が見られる。

この単元においては、具体的なめあてを基に学習の見通しをもつこと、学習した表現を繰り返し用いると共に、分かりやすく伝えるための工夫を個人や全体で考える振り返りの場を設定することを通して、学習した表現を生かして自信をもって話したり聞いたりすることができるようにしたい。



2 授業の実際

視点Ⅰ 必要感のある課題の設定

① 場所を表す言い方や道案内の表現を用いて話したり聞いたりする必要感のある課題や場面を設定する。

- 単元の初めに“The future of Sugita”をテーマとして提示し、「未来の杉田にあったらよい場所」を自由に想像する活動を行った。その活動を基に、『未来の杉田にあったらよい場所』を友達やALTにくわしく分かりやすく伝える」という単元のゴールを設定した。ゴールを達成するために必要なことは「場所を表す言い方」と「道案内の表現」であることを全体で確かめ、単元の計画を立てた。

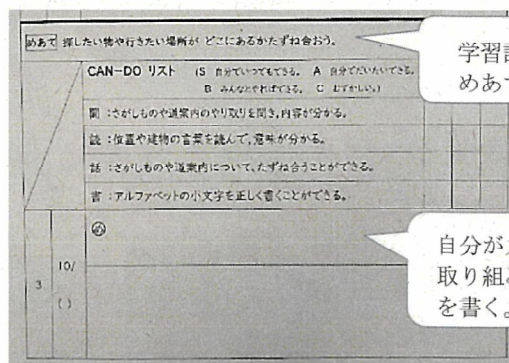
② 本時の学習で目指す姿を具体的にイメージすることを通して、めあてや活動の見通しをもつことができるようにする。

- 前時の振り返りや本時の学級のめあて「友達が行きたいところに行けるように道案内をしよう。」を基に、自分が力を入れて取り組みたいことを振り返りシートに書いた。



<児童のめあて>

- “Turn right.”などの道案内の言い方を言えるようにする。
- ゆっくりはっきり道案内をしたい。



学習計画によるめあて

自分が力を入れて取り組みたいことを書く。

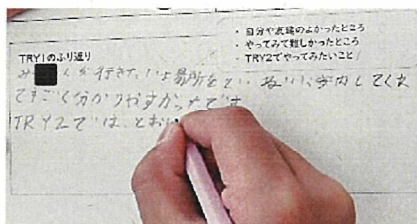
視点Ⅱ

自分の学習状況や成長を具体的に捉えることができる振り返り

- ① 活動の中間と最後に振り返りを設定することで、できるようになったことを振り返ると共に、次になりたい姿や、自分の表現に取り入れたい工夫を捉えることができるようにする。
- 活動の中間の振り返り
- 〔Try 1〕の活動を振り返って、道案内の仕方や身振りなどのよかった点、難しかった言い方をペアで確かめ合った。その後、〔Try 2〕に生かしたいことを全体で発表して共有した。

<児童の発表>

- はきはきと話しているよ。
- 相手が聞いたときに、すぐに答えられるようにしたい。



- 中間の振り返りを生かして、[T r y 2] の道案内に取り組んだ。



- 終末における振り返り
 - ・ 振り返りの視点を基に、本時の振り返りをシートに記入した。

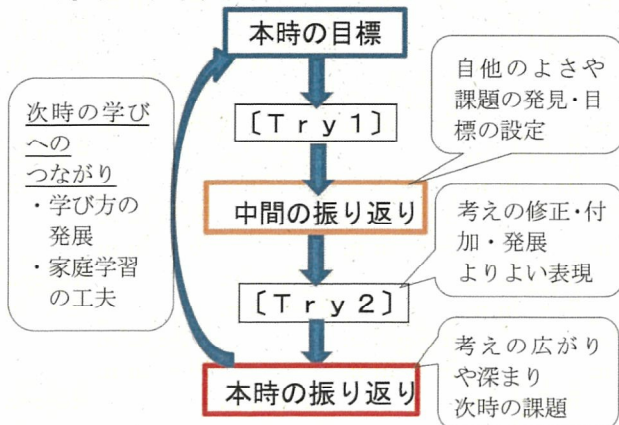
振り返りの視点

- どのように取り組み、何ができるようになったのか。(知・技)
- 友達のよい姿や参考にしたい姿。(思・判・表)
- 次の時間に何を学習したいか。(主)

<児童の振り返り>

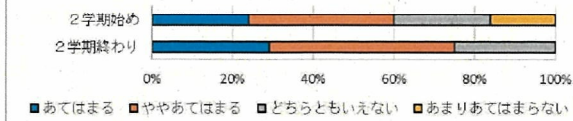
- 苦手だった“for ○ blocks”の言い方を何回も練習したら、言えるようになってきた。
- さんがはっきり言っていてよく伝わったので、自分もはっきりと言えるようにしたい。
- ② 振り返りを生かした学びのサイクルを意識し、目標を達成するために必要なことを、単元を通して考えながら学習することができるようにする。

<学びのサイクル>

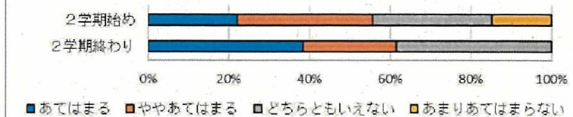


3 子どもの変容

学習の中で、迷ったり、なかなかできなかったりすることがあっても、イライラしたり、途中でやめたりしないでがんばることができる。



学習がうまく進まなくなったとき、自分の考え方や自分が使った方法を振り返って、どこが悪かったのか、どこに問題があったのか、考えることができる。



(考察)

どちらの項目も「あてはまる」「ややあてはまる」の割合が増加した。学習の見通しをもつことや振り返りを継続することが、よりよい方法を考えながら、あきらめずに取り組むことにつながったと考える。

4 研究のまとめ (○成果●課題)

【視点Ⅰ】

- 振り返りシートに、本時のめあてに加えて自分が力を入れて取り組みたいことを書くことで、目的意識や学習の見通しをもって道案内のやり取りをすることができた。
- 道案内をする相手が学級の友達や日本語の通じるALTであり、気軽にやり取りができた一方で、英語を用いる必要感が薄かった。伝える相手を地域の方や中学校のALTにすることで、伝える必要感が高まったのではないかと考える。

【視点Ⅱ】

- 振り返りの視点を提示することで、授業中の取り組みの様子や、成果を具体的に書くことができるようになってきた。それを次時の初めに紹介することで、自分の取り組みに自信をもち、友達のよさに気付いたり、本時の課題につなげたりする姿が見られた。
- 中間の振り返りの際に、[T r y 1] の動画や実際のやり取りを見ながら、自分と友達を比較したり、より分かりやすい道案内の仕方を検討したりする時間が必要であった。

実際の指導案はこちらへ▶



1 単元によせる授業者の思い

生徒は明るくまじめで、意欲的に授業に取り組むことができる。男女の仲がよく、ペア学習やグループ学習によるコミュニケーション活動に協力して取り組むことができる。しかし、英語を得意とする生徒は少なく、書く活動においては苦手意識をもっている生徒が多い。

本単元は、防災というテーマを扱っている。多くの災害に直面する日本に住んでいることを意識させ、自己を守り、同時に他者を守るという意識を高めさせることができる教材であると考えます。

「町中での手助け」では、既習事項や新たな申し出の仕方を用いて、場面や状況、相手を意識した申し出になるように考えを深めさせたい。さらに自分たちの表現と友達の表現を比較し、より相手に伝わりやすい申し出になるためにはどうしたらよいかを考えさせ、やり取りを修正し、進化させた申し出になるように取り組ませたい。

様子を録画し、教師のタブレットに共有ソフトで送らせた。また、英語が不得意な生徒の手助けになるように、申し出の表現プリントを配付した。



町中での手助け—申し出る

助ける側の表現	助けてもらう側の表現
Can I help you? (お手伝いしましょうか。)	Please help me.
Shall I take you there? (そこにお連れしましょうか。)	Please tell me the way to the library.
Would you like me to carry your bag?	Can you help me? (手伝ってくださいか。)
(あなたのカバンをお持ちしましょうか。)	Could you help me buy a ticket?
Is there anything I can do for you?	(物を買うのを手伝ってくださいませんか。)
(何かできることはありますか。)	Could you please tell me how to get to Nihojima Hospital?
Where would you like to go? (どこへ行きたいですか。)	May I ask you a favor? (お願いしてもよいですか。)

2 授業の実際

視点 I

既習の学びと関連づけて、相手を意識したコミュニケーションの工夫

① ALTの困っているジェスチャーを見て、どんな言葉かけをするか生徒に考えさせた。既習事項がいろいろと出された。それらの表現を用いることで、場面や状況に合った言葉かけができることを確認した。また、本文を用いて新しい表現にも触れさせ、どの表現を用いれば良いか、相手の置かれている状況に合わせて、意識して伝える必要があることも確認した。Try 1では、3人のグループを作り、班でストーリーを考えさせ、その

② 生徒から教師のタブレットに送られてきた動画を、全員で共有した。他の発表と自分たちの発表とを比較させると「やり取りをしている場に相手がいると思って話しかけるとよい」「もっとゆっくり、はっきりと話した方がよい」などの協働的な学びを通しての気づきがあった。Try 2では、より相手の気持ちに寄り添った表現になるように活動させた。2回目の動画を全体で共有したときには、伝えるということはただ話すだけではなく、相手の立場を考えて、どのような言葉かけをすればよいか、適切な表現は何かを考える必要があることを全体で確認した。例えば“Shall I ~?”の

表現と同じ意味の“Do you want me to ~?”

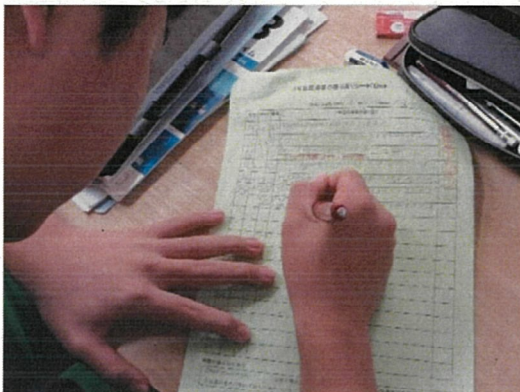
「～してほしいですか。」を、目上の方に伝えるとしたら、“Would you like me to ~?”の方が丁寧であって、相手に合わせて適切な表現であることなどを考えさせた。



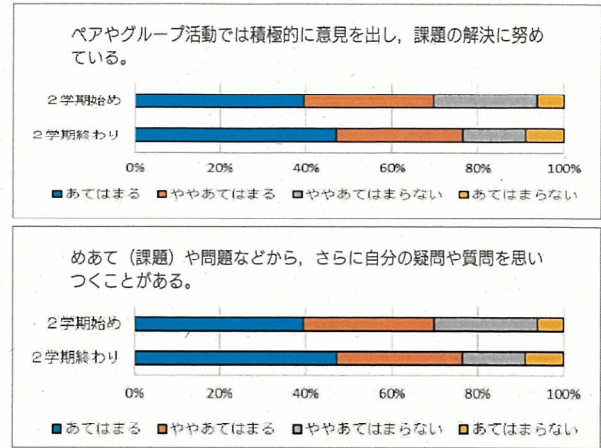
視点Ⅱ

学びの連続性につながる振り返りの工夫

- ① 「振り返りシート」には振り返りの視点を提示し、その中から選んで振り返りをさせた。継続して「振り返り」をしていくことで、この単元で何を学んできたのかを意識化するとともに、「振り返り」を前時と本時の橋渡しとして活用することで、本時の授業にスムーズに入ることができた。
- ② 友達の「振り返り」を聞くことで、この時間に学習したことを別の視点で振り返ることができ、自分が何を学んだのかを見つめ直すきっかけとなったと思われる。そこから、次に学びたいことは何か等、疑問点や課題が見つかるのではないかと考えられる。そしてそれが、さらに次時の学習への意欲付けに繋がると思われる。



3 子どもの変容



〈考察〉

ペアやグループ活動に積極的に取り組んでいる生徒が増えてきた。めあてや問題などから自分の疑問や質問が出るということは、興味・関心をもって課題に取り組んでいると考えられる。

4 研究のまとめ（○成果●課題）

【視点Ⅰ】

- 互いの動画を見ることで、自分の表現と他者の表現を比較することができ、他者のよい表現を自分の表現に取り入れたり、改善したりすることで表現力が高まったと考えられる。
- **Try 1**の動画を見て、よかった点を共有したが、それを板書せずに口頭での確認のみとしてしまった。生徒の思考に寄り添った構造的な板書をすれば、さらに**Try 2**の活動が表現力豊かなものとなったと思われる。

【視点Ⅱ】

- 生徒が、本時で「何がわかったのか（知識・技能）」、「どんな学びがあったのか（思考力・判断力・表現力等）」、「次に同じような活動をする際はどうしたいのか（主体的に学習に取り組む態度）」等の観点に照らして振り返ることで、次の学習への意欲付けに繋がったものと考えられる。
- 代表生徒の「振り返り」を聞いて参考にした結果、自分の考えを修正、進化、発展させたと考えられる。

実際の指導案はこちらへ▶



1 単元によせる授業者の思い

第9回学級会「学級のマスコットキャラクターを作ろう」の、話し合いをまとめる場面のことである。比べ合う場面で多くの意見が出た後、S男は「やっぱり学級目標の『笑顔・やさしい・協力』の全部が入っているキャラクターにしたい」と、話した。それを聞いたA男は「(3つのキャラクターのうち)『コウモリ』は、仲間と餌を分けて生活していて『やさしい』し『協力』も入っているしイラストも『笑顔』のキャラクターだ」と話し、子どもたちから拍手が自然と出て合意形成することができた。

授業者は、常に学級目標を意識して考えているS男や、友だちの考えを生かして全体で合意形成しようと提案したA男の姿が、さらに学級全体に広がっていくことで「自分もよく、みんなもよい」方法を考え、互いの考えを認め合い、高め合う集団になっていくと考えた。



二度、ゲストティーチャーを迎え、一緒に安達太良山登山を行った学習を写真で振り返り、どのようなお礼の気持ちを伝えたいのかを考える機会を確保したことで、一人一人が話し合いの柱についての意見をもって話し合いに臨むことができた。

視点Ⅱ 自分の考えの立場や思いの可視化

国語科の学習を生かし「お礼の気持ちが相手に伝わるか」という観点で表に整理し、意見の理由を比べることができるようにした。

その後、計画委員は意見を整理し(写真2)話し合いの進め方をイメージしてから話し合いに臨んだ。合わせることができそうな意見を近くに書いたことで、子どもたちが比較して考える姿が見られた。

何でし質問 タイム	歌	登山の感想	お礼を言う	ポスター ビラジョン
話し合いの進め方をイメージしてから話し合いに臨んだ。	うべしいし思ふんか 百種ごきあなわさる	登山とてきいふんか お礼とてきいふんか	伝わるからいい お礼の気持ちを伝える お礼の気持ちを伝える	伝わるからいい お礼の気持ちを伝える お礼の気持ちを伝える

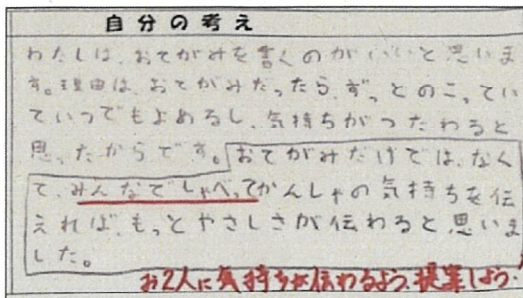
< 写真2 意見を整理し、理由を書き込んだ表(模造紙) >
さらに、意見の理由を書き込んだことで提案理由に戻り、合意形成する子どもたちの姿が見られた。

2 授業の実際

視点Ⅰ

議題を自分事として捉え、思いを高めるための機会の確保

総合的な学習の時間と学級活動を関連付けて議題を設定し、ゲストティーチャーに対するお礼の思いを高め、子どもたちが自分の考えをもち、進んで話し合うことができるようにした。



< 写真1 事前に考えを書いた話し合いカード >

- K 男 時間がギリギリだからお礼の言葉と書いた人に悪いけど消すしかないと思います。
- 司 会 お礼と登山の感想と書いた人どうですか。
- N 男 でも、お礼を言うのは、気持ちが伝わるからいいと思います。
- S 男 提案理由にお礼の気持ちを伝えたいと書いてあるから、やっぱりお礼は必要です。
- K 男 それなら、お礼と登山の感想を合わせて…代表の人が話せばいいと思います。

教室に意見の表を掲示しておいたことで、子どもたちは意見のよさや違いを比較して聞くことに専念することが容易になった。だからこそ「お礼と登山の感想を合わせ、代表が話す」という提案がされ、子どもたちが納得して合意形成することができた。

視点Ⅲ

子どもと子どもの思いをつなぎ、合意形成を図るための教師のかかわり方

「どうしてその活動がお礼になるのか」について問い返すことで、子どもたち自身が「お礼」の活動の意味を明確にすることができるようにした。

下記は「お礼の会でポスターの発表をしたい」と発言したK男の思いをさらに引き出し、学級全体に広げるために授業者が問い返した場面である。

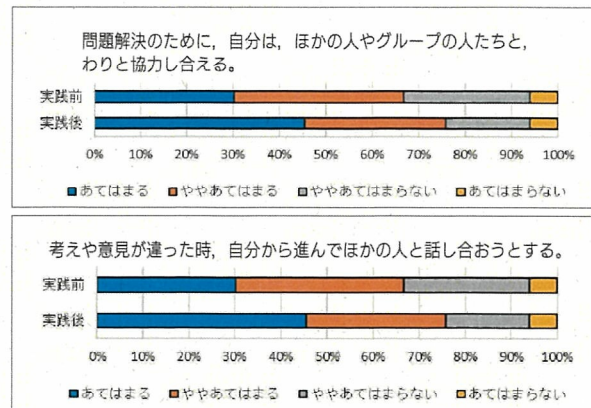
授業者	ポスターの発表をすることがお礼になるというのは、どういうことなのかな。
K 男	渡辺さんと中山さん2人のお話を『ここまで覚えていました』というしるしになるから、2人も喜んでくれると思います。
司 会	皆さんは、今のK男さんの考えについてどう思いますか？
C	それは、いいと思います！



＜写真3 K男「2人の話を覚えていた印になる」＞

始め、K男は「みんなも知らないことが知れると思うからポスターを発表したい」と、理由を話していたが、教師が問い返したことで「ゲストティーチャーにお礼を伝えたい」という提案理由に戻り、相手のために何ができるのか考え、思いを伝える姿が見られた。K男の思いを学級全体に広げたことで、子どもたちが納得して合意形成することができた。さらに、終末の教師の話で「K男さんのように、自分たちの成長を見てもらおうというお礼の伝え方もあるね」と、相手意識をもって発言したK男の考え方のよさを価値付けることができた。

3 子どもの変容



〈考察〉

互いの考えのよさを認め、生かすことができるよう授業を進めてきたことで「協力しよう」と問題解決に前向きになってきたことが分かった。また、それぞれの思いを伝え合う話し合いを経てお礼の会を実現することでできたことで「考えや意見が違った時には、話し合って解決しよう」とする気持ちが高まったことを読み取ることができた。

4 研究のまとめ (○成果●課題)

【視点Ⅰ】

- 「お礼として何を伝えたいのか」をはっきりもたせることで、温かい思いが表れる話し合いを目指したかった。必要に応じて「お礼としてどんな気持ちを伝えたいのかな」と問い返し、一人一人の思いの違いを伝え合うことも必要だと感じた。

【視点Ⅱ】

- 事前に意見の表を掲示しておいたことで、子どもたちは理由を聞くことに専念し、比較して考えることができた。

【視点Ⅲ】

- 「どうしてポスターの発表がお礼になるのかな」「どちらの考えも生かす方法はないかな」という教師の働きかけにより、子どもたちが合意形成しようと歩み寄る姿が見られた。
- 教師が子どもの姿を見取り、全体に広げるために、「意見を比較して考える姿」「友だちに寄り添い、提案する姿」等、子どもたちが合意形成しようとする姿について、より具体的なイメージをもつ必要があった。



実際の指導案はこちらへ▶

「鬼遊び 開戦ドン」

友達とつながりをもちながら集団の中で自己を発揮しようとする
幼児の育成

とうわこども園 安齋 紀子

1 題材によせる保育者の思い

本学級の幼児は、みんなで取り組む楽しさや力を合わせて目標に向かう楽しさを感じてきている一方で、自分の意見を言える子もいれば自分の意見を通そうとする子、うまく思いを伝えられず相手の意見に流されてしまう子も少なくない。「鬼遊び 開戦ドン」は、ジャンケンの勝ち負けによって追いかけるか逃げるかが決まる遊びなので、自分の思いを出せる幼児、出せない幼児どちらにも自己発揮のチャンスが出てくると思われる。また、捕まった幼児が遊びに復活できるように助け鬼の要素を取り入れることで、仲の良い友達だけでなくそれ以外の友達を助けたり助けられたりする機会が出てくるため、友達とのかかわりも広がるのが期待できる。友達のよさに気付いたり、自分の得意な分野で力を発揮したりすることで自信につながるようにするとともに、遊びの中でトラブルが見られた時は、葛藤体験を味わったり、友達の思いを受け入れたりできるような話し合いの時間を確保し、一人一人が集団の中で友達とつながりを持ち、その中で自己発揮していけるようにかかわっていきたいと考える。



逃げられないように誰が守る？

私守るよ！

- ② 幼児の発言に対して質問したり聞き返したり確かめたり言葉を補ったりして、自分の考えを自覚し動きをイメージできるように援助した。



C: 2人で助けに行くのはどう？

T: なるほど！2人で助けに行ったらどうかなだっ。どう？

視点Ⅱ

多様な動きの必要性に気づき遊びの連続の中で友達とのつながりを深める援助の工夫

2 保育の実際

視点Ⅰ

学びを自分事として捉え自己発揮する指導の工夫

- ① 作戦会議においてホワイトボードを活用して「逃げる」「捕まえる」以外にも「助ける」「守る」などの多様な動きの役割に気づき、自分の考えを可視化できるようにした。



はじめは、ジャンケンして追いかけたり追いかけられたりを楽しんだ。

誰か助けて～



助けに行きよ。

次第に幼児と話し合いながら助け鬼の要素を加え、助けたり助けられたりの役割分担からチームとしての遊びを楽しめるようにした。

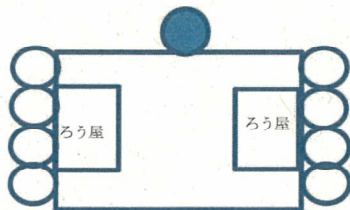
② 捕まった時にはどうしたらいいか、逃げられないようにするにはどうしたらいいか、遊びを繰り返しながらその都度振り返り、守ったり助けたりする動きなどを周りに知らせ、チームが勝つための方策を考えさせていった。



<活動後の振り返りの様子>

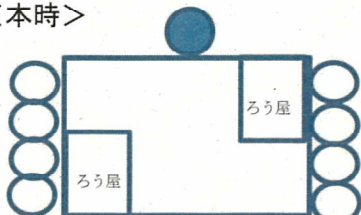
③ 本時のねらいを具現するため、より守りやすく助けやすくなるように環境を再構成した。

<前時>



鬼に捕まった幼児が待つ場所を真ん中にして遊ぶ。

<本時>



● 保育者 ○ 幼児

捕まった子を助ける幼児の動き、逃げる幼児の動きがぶつからないように位置を変える。

3 子どもの変容から見た成果と課題

(○成果●課題)

【視点Ⅰ】

- ホワイトボードで考えを可視化することで自分の動きを具体的にイメージするとともに、チームのことを考える姿が見られるようになった。
- 作戦会議では、保育教諭が幼児の発言を聞き返したり確認したりすることで周りの幼児にも伝わりやすくなり、具体的な動きにつながるイメージをもつことができた。

● 意見を言える子だけでなく、なかなか発言できない子が少しでも意見を言えるようにと作戦会議に少し時間をかけすぎてしまった。作戦会議の時間を短くして、もっと遊ぶ時間を確保し回数を増やして試行錯誤したり工夫したりする機会を多くしていきたい。

【視点Ⅱ】

- 小さな成功体験を見逃さず、その都度振り返りで頑張っている姿を周りにも知らせながら関わったことで少しずつ自信につながっていき、いろいろな動きに挑戦しようとする姿が見られた。
- いろいろな動きの中で自分の得意な動きをどれか一つは選択して遊ぶことができていた。小さな成功体験を認めてあげることで他の動きにも挑戦しようという意欲につながっていったように思われる。

○ みんなで勝とうという意識やチームとして役割分担によるつながりが見られ、振り返りにおいて「○○ちゃんが助けてくれて嬉しかった」「○○ちゃんがみんなに守ってと言っていたので守るのを頑張った」など友達のよさを認め合う姿がみられた。

● 振り返りにおいて、友達の思いに気付き「今度は僕が行くから守ってね。」「私が変わるね。」など役を交換したり互いにやりたいことを具現しあえたりできるよう、一人一人の動きを捉え個の思いを全体に投げかけたり共有したりしてチームの関係性をさらに築いていけるような援助のあり方を工夫したい。

幼稚園

実際の指導案はこちらへ▶



IV 研究のまとめ

1 研究を振り返って

(1) 研究授業の成果と課題 (○: 成果 ●: 課題)

学習基盤・授業構想

- 本市の目指す子ども像について指導委員全員で検討したことにより、イメージを共有して研究を進めることができた。
- アンケート等を実施・分析し、子どもの実態、教師の課題を踏まえた手立てを設定できた。
- 学級の実態に応じて単元計画を見直した。既習事項を活用する時間が確保でき、定着につながった。
- 自分が担当する子どもを具体的にイメージした評価基準について、吟味する必要があった。
- 学習指導要領の読み取りの深さ、教材研究の深さに課題があった。
- 研究授業への見通しが甘く、実施日程や指導案作成が後ろにずれてしまった。
- 人間関係によって協働的な学びが停滞する場面があった。

⇒ 指導委員会で、「本市の目指す子ども」の具体的な姿について時間をかけて検討した結果、テーマを個々の研究に落とし込むことができた。共同研究においては、全員が一つの目標に向かうようイメージを共有し、それぞれが子どもの実態を踏まえた具体的な研究構想を立てることが大切である。
また、安心して学習できる環境の下でこそ協働的な学びが充実したものになる。日頃の学級づくりが、学習の基盤として重要であることは言うまでもない。

教材課題の把握

- 身近な課題、知的好奇心を揺さぶる課題の提示や発問により、課題を自分事として捉えて学習に取り組む姿が見られた。
- 予想や考察の場面で根拠をもって書かせることにより、考えを深めさせることができた。
- 子どもにとって、必要感・必然性のあるもの、問いや疑問が生まれるものになっていなかった。
- 子どもが捉えやすいものになっていなかった。

⇒ 子どもが主体的に学ぶためには、調べたくなる、やってみたくなる、学ぶ必然性のある学習対象(教材)の提示、学習課題(めあて)の設定が大切である。学習課題は、子どもが何を追究すればよいのか具体的にイメージでき、問いをもたせる表現にする。また、根拠を基に予想させるなど、追究・解決への見通しももたせたい。

追究・解決

- 問いをもたせる教師の働きかけにより、意欲的な対話など主体的に学ぶ姿が見られるようになった。
- 協働的な学びを通じた成功体験の積み重ねにより、課題解決への自信や挑戦する意欲が高まった。
- ねらいや焦点の当て方などを明確にした話し合いができなかった。
- 考えをつなげ、深めるコーディネートが不十分だった。
- デジタルとアナログの効果的な活用について研究する必要がある。

⇒ 子どもの話し合いの場面で、効果的なコーディネートを行うことに課題を感じている教師は少なくない。それは指導委員にとっても同様であることがうかがえる。コーディネートの主な目的は、思考や発言を促し、新たな問いをもたせて深めたり広げたりすることで、子どもが主体的に学ぶための原動力を生み出す大切な指導技術である。日頃から、子どもが中心になる授業、気付きを引き出す授業を心がけたい。

振り返り

- タイムマネジメントを意識して、振り返りの時間を確保した授業に心がけたことにより、学びを自分事として捉える姿が見られた。
- 自他のよさ、力の高まりが実感できる振り返り、次の授業につながる振り返りができなかった。

⇒ 主体的な学びを実現するためには、本時の学習に子ども自身がどのように関わり、何を学び、何ができるようになったのか、がんばったことは何か、友達のよかったところは何か、もっと知りたいことや疑問なことはないかなど、自らの視点で学びを振り返ることが大切である。振り返りは主体性を伴う活動であり、自己を客観視する活動でもある。
指導委員の課題にも挙げられたように、適切なタイムマネジメントによる振り返りの時間の確保は、解決しなければならない課題である。視点を明確にした振り返りを通して、主体的な学びの実現を図りたい。

(2) 研究授業の意味 ～授業者として、参観者として～

■ 研究授業の目的を明確にする

- ・ 2回の研究授業で、指導主事の先生から授業の改善点などを指導していただいたことで、研究の視点が明確になり、内容を焦点化して第2回授業研究での 授業改善を図ることができた。
 - ⇒ 授業改善への気付きがあっても、改善策を検証する機会がなければ、手立ての有効性を確認できない。そのため、指導委員会では1回目の研究授業で指導担当者の参観を通して課題を明確にし、改善策を講じた2回目の研究授業でその検証を行った。目的の異なる2回の研究授業と、互見授業では得られない指導主事等による専門的かつ客観的な助言がポイントである。

■ 授業参観の機会を確保する

- ・ 学校訪問や互見授業で参観する貴重な機会をいただいたことで、授業づくりの視点が明確になるなど勉強になった。
- ・ 中学校の授業を参観し、事後研究会にも参加する機会をいただいた。小学校での学びがどのように生かされているかを知ることができた。
 - ⇒ 互見授業は手軽にできる研修の一つである。同じ研究教科、専門教科同士の視点で行ったり、他教科または他校種の視点を取り入れて行ったりするなど、互見授業の目的・ねらいを考えた互見授業を実施することが大切である。また、積極的に指導主事等の参観、指導・助言をいただく機会を設けるようにしたい。

■ 研究授業での学びを日々の授業に生かす

- ・ 1年間継続して、研究のテーマをもとに授業を実践できたことがよかった。1回目の授業で指導していただいたことを意識して、日々の授業を実践し、子どもに還元することができた。
- ・ 次年度は、学んだこと、発見できたことを同僚へ伝達できるように努めたい。
 - ⇒ 日々の研鑽が求められる教職にあって、「研究のための研究」になっていないか、自身の授業を振り返ることが大切である。研究授業が終わった解放感から、授業が以前の状態に戻ってしまったのではもったいない。授業研究を何のために行い、どのような子どもの育成を目指して研究を行ったのか、研究の原点に還って日々の授業実践に生かし、継続的に授業改善を進めるようにしたい。また、研究授業を通した各自の学びを職場全体で共有し、授業改善の風土を培っていくことが大切である。

2 おわりに

今年度の研究の特色は2つある。1つ目は、本市の目指す子ども像の実現に向け、指導委員が個別の視点で授業研究を進め、共同研究としてまとめる手法を採ったことである。共通の視点を設けず個別化したねらいは、研究を「自分事」として捉え、目の前の子どもに寄り添った授業改善により、指導委員各々が主体的に進めることにあった。個別の視点で研究を進める以上、目指す子どもの具体像を適切にイメージし、統一感のある研究にすることが求められた。そのため、その具体像を全員で検討し、出されたイメージを分類、共有することから研究がスタートした。

2つ目は、研究授業を2回行ったことである。前述したように、課題の洗い出しと改善策の検証という、目的の異なる2回の研究授業を位置付け、同僚とともに研鑽し合い、指導担当から専門的かつ客観的な助言を行うことで、授業力の向上を目指した。

これら、指導委員の研究の一端をまとめた本冊子が、本市教職員の授業改善の一助となり、本市の目指す子どもが一人でも多く成長することを切に願う。

(委員長 日下部準一)

令和5年度二本松市教育委員会指導委員会作成委員 (◎委員長 ○副委員長)

◎日下部準一 (東和中学校長)	○菅野智香子 (二本松南小教頭)	
樽井奈緒子 (二本松南小)	中山 万由 (小浜中)	山本 雄太 (杉田小)
先崎 貴徳 (東和中)	野地 吾勝 (新殿小)	橋本 裕子 (安達中)
金澤 理洋 (小浜小)	本多 一雅 (岩代中)	本田 政史 (渋川小)
大沼 仁 (二本松三中)	遊佐久美子 (二本松二中)	渡邊 康貴 (東和小)
草野 洋一 (二本松一中)	阿部 理佳 (石井小)	山寺 晶子 (杉田小)
武田由香理 (二本松三中)	福本 拓人 (岳下小)	安齋 紀子 (とうわこども園)

令和5年度二本松市教育委員会作成委員

渡辺 惣吾 (教育長)	丹野 学 (前教育長)	太田 孝志 (学校教育課長)
長澤 潤 (管理係長)	藤原 謙 (指導係長)	大関 智幸 (指導主事)
奥山 満 (指導主事)	佐藤 和彦 (指導主事)	糺田 惣男 (指導主事)
須田 康仁 (指導主事)	糺田 祐子 (指導主事)	

